社会資本整備総合交付金事業関係埋蔵文化財調査報告

久富古墳群

－福岡県京都郡みやこ町犀川久富所在古墳群の調査－

福岡県文化財調査報告書　第 289 集

２０２６

九州歴史資料館

久富古墳群
福岡県文化財調査報告書　第二八九集
二〇二六
九州歴史資料館

社会資本整備総合交付金事業関係埋蔵文化財調査報告

久富古墳群

－福岡県京都郡みやこ町犀川久富所在古墳群の調査－

福岡県文化財調査報告書　第 289 集

２０２６

九州歴史資料館

序

本報告書は、令和６年度に社会資本整備総合交付金事業（県道下深野犀川線道路新設事業）に伴い、福岡県県土整備部京築県土整備事務所からの執行委任を受け、発掘調査を実施した、京都郡みやこ町犀川久富に所在する久富古墳群の発掘調査報告書です。

本遺跡が所在するみやこ町には数多くの古墳が分布し、国内でも有数の規模を誇る横穴式石室を有する、国指定史跡綾塚古墳・橘塚古墳が所在しています。

今回の調査では、古墳時代終末期の古墳と小石室を確認し、当該地域の歴史を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査から報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々に、ご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

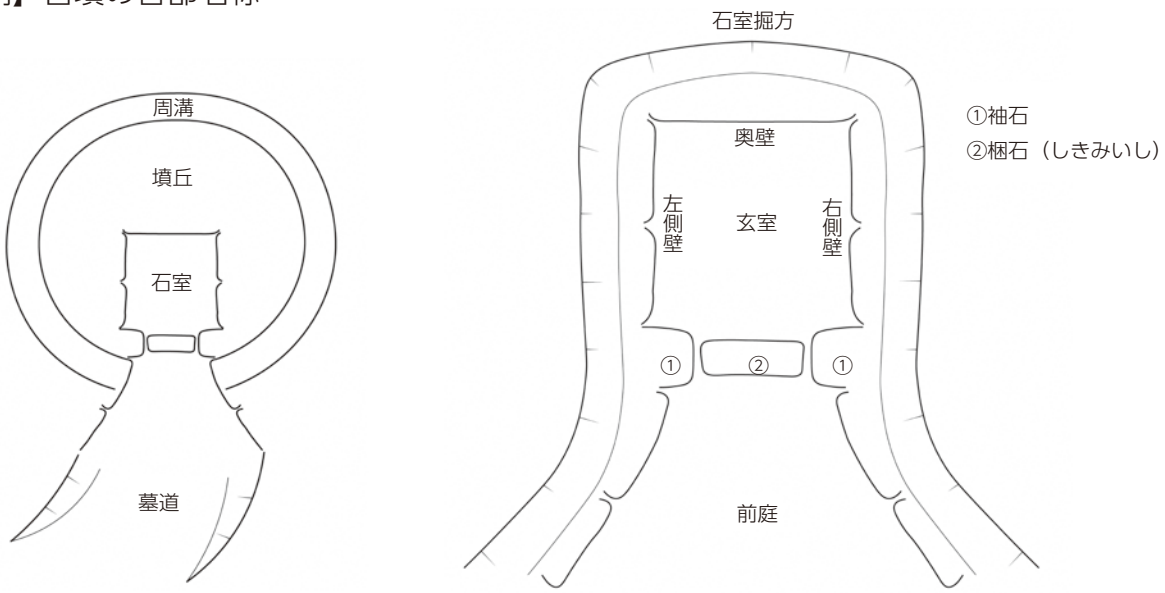
令和８年３月 31 日

九州歴史資料館
館長　吉田　法稔

例　言

1．本書は、社会資本整備総合交付金事業（県道下深野犀川線道路新設事業）に伴い、令和６年度に九州歴史資料館が実施した久富（ひさどみ）古墳群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査および報告書作成は、福岡県県土整備部京築県土整備事務所からの執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。
3．本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者の出見優人・進村真之が行い、遺物写真については、西宏明が行った。空中写真撮影については、ドローンによる撮影をワールド･フォト･サービスに委託した。
4．本書に掲載した遺構図の作成は、調査作業員の協力を得ながら調査担当者が行い、遺物実測図は出見が作成した。
5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館にて実施した。
6．出土遺物および図面、写真等の記録類は、九州歴史資料館にて保管する。
7．本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「行橋」「豊前本庄」を改変したものである。本書で使用する座標は世界測地系による座標を使用し、方位については、国土座標Ⅱ系による座標北を使用している。
8．本文中で記載する古墳の各部名称については、下に掲載した凡例に従っている。
9．本書の執筆と編集は、出見が行った。

【凡例】古墳の各部名称



目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査の経過 …… 1
3．調査の組織 …… 2

Ⅱ　位置と環境 …… 3
1．地理的環境 …… 3
2．歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査の記録 …… 6
1．遺跡の概要 …… 6
2．遺構と遺物 …… 8
2－1．古墳 …… 8
2－2．小石室 …… 24
2－3．その他の遺構 …… 27

Ⅳ　おわりに …… 28

挿図目次

第1図　みやこ町の位置図 …… 1
第2図　周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 5
第3図　調査区位置図（1/2,000） …… 6
第4図　久富古墳群遺構配置図（1/600） …… 7
第5図　久富1号墳平面・掘方実測図（1/60） …… 8
第6図　久富1号墳墳丘土層図（1/60） …… 9
第7図　久富1号墳石室実測図（1/60） …… 10
第8図　久富1号墳玄室遺物出土状況図（1/40） …… 11
第9図　久富1号墳前庭部実測図（1/60） …… 12
第10図　久富1号墳前庭部土層図（1/60）…… 12
第11図　久富1号墳出土遺物実測図（1/3）…… 14
第12図　久富2号墳平面・掘方実測図（1/60）…… 15
第13図　久富2号墳墳丘・前庭部土層図（1/60）…… 16
第14図　久富2号墳石室実測図（1/60）…… 17
第15図　久富2号墳出土遺物実測図（1/3）…… 18
第16図　久富3号墳平面・掘方実測図（1/60） …… 19
第17図　久富3号墳墳丘土層図（1/60） …… 20
第18図　久富3号墳石室実測図（1/60） …… 20
第19図　久富3号墳出土遺物実測図（1/3）…… 21
第20図　久富4号墳墳丘土層図（1/60）…… 22
第21図　久富4号墳石室実測図（1/60）…… 23
第22図　久富4号墳出土遺物実測図（1/3）…… 23
第23図　久富1号小石室石室実測図（1/30）…… 25
第24図　久富1号小石室掘方実測図（1/30）…… 25
第25図　久富2号小石室石室実測図（1/30）…… 26
第26図　久富2号小石室掘方実測図（1/30）…… 26
第27図　久富古墳群ピット実測図（1/30）…… 27
第28図　久富古墳群ピット出土遺物実測図（1/3、1/1）…… 27

図版目次

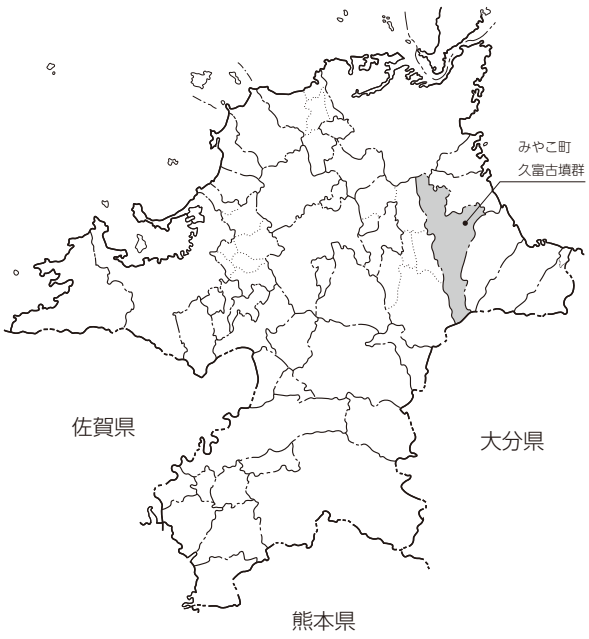
図版１　１　久富古墳群全景（真俯瞰）　２　久富古墳群全景（西上空から）
図版２　１　久富古墳群調査範囲（真俯瞰）　２　１号墳・２号墳全景（真俯瞰）
　　３　２号墳全景（真俯瞰）
図版３　１　３号墳全景（真俯瞰）　２　１号小石室全景（真俯瞰）
　　３　４号墳・２号小石室全景（真俯瞰）
図版４　１　１号墳調査前全景（南から）　２　１号墳調査後全景（南から）
　　３　１号墳前庭部（西から）
図版５　１　１号墳前庭部出土須恵器（南東から）　２　１号墳閉塞石（南から）
　　３　１号墳奥壁（南から）
図版６　１　１号墳右側壁付近出土須恵器（西から）　２　１号墳前庭部断面土層（南東から）
　　３　１号墳墳丘北側ベルト土層（西から）
図版７　１　２号墳調査前全景（南東から）　２　２号墳調査後全景（南東から）
　　３　２号墳奥壁（南東から）
図版８　１　２号墳閉塞石（南東から）　２　２号墳墳丘西側ベルト土層(北西から)
　　３　２号墳墳丘北側ベルト土層（南西から）
図版９　１　３号墳調査前全景（南東から）　２　３号墳調査後全景（南から）
　　３　３号墳石室（南から）
図版 10　１　３号墳石室左側壁（南東から）　２　３号墳石室右側壁（南西から）
　　３　３号墳外護列石（南西から）
図版 11　１　４号墳検出時（南東から）　２　４号墳調査後全景（南東から）
　　３　４号墳閉塞石付近出土須恵器（南東から）
図版 12　１　４号墳左側壁付近出土須恵器（南東から）　２　４号墳石材撤去後（南東から）
　　３　４号墳石材撤去後（北東から）
図版 13　１　１号小石室調査後全景（南西から）　２　１号小石室調査後全景（北東から）
　　３　２号小石室検出時（南から）
図版 14　１　２号小石室調査後全景（南から）　２　２号小石室調査後全景（南東から）
図版 15　出土遺物１（１号墳出土遺物）
図版 16　出土遺物２（１・２号墳出土遺物）
図版 17　出土遺物３（３・４号墳出土遺物）
図版 18　出土遺物４（４号墳・ピット出土遺物）

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯

県道下深野犀川線は、築上郡築上町下深野から京都郡みやこ町犀川本庄までを結ぶ一般県道である。

令和６年１月 12 日に県道下深野犀川線の工事予定地内で古墳を確認したとの連絡を受け、同月 18 日に、みやこ町教育委員会、福岡県教育庁教育総務部文化財保護課、九州歴史資料館の三者による現地踏査を行った。踏査の結果、古墳３基を確認し、周辺の尾根沿いについても埋蔵文化財の存在が予測された。１月 30 日には、福岡県県土整備部京築県土整備事務所を加え、工事の設計変更および遺跡の現地保存に関する現地協議を行ったが、路線の設計が既に完了し、工事発注の直前であったことから、設計変更は困難であるとの回答を得たため、記録保存調査を実施することとなった。調査については、京築県土整備事務所からの執行委任を受け、九州歴史資料館が実施することとなり、調査予定地内における樹木伐採が終了した後に調査を開始することとした。



第１図　みやこ町の位置図

2．調査の経過

調査予定地での作業は、令和６年５月８日から開始し、発掘調査を開始する前に測量に必要な座標杭の打設および現地踏査を行った。その後、1/100 の現況地形図を平板測量により作成した。

令和６年６月 11 日から調査作業員を投入して、発掘調査を開始した。事前の踏査で古墳を確認していた丘陵頂上付近については、樹木伐採が終了していなかったため、調査予定地内の丘陵西側斜面上において人力によるトレンチ掘削を行い、本調査を要する範囲の絞り込みを行った。その結果、踏査で確認していた古墳３基以外に、墳丘が削平された古墳１基と小石室２基を確認したため、これらの遺構についても本調査を行うこととなった。なお、丘陵の北側斜面については、傾斜が急だったこともあり、人力による掘削は行わず、重機を入れて掘削を行い、遺構がないことを確認している。７月 20 日～８月６日までは丘陵頂上付近における樹木の伐採のため作業を中断し、８月７日から作業を再開して、丘陵頂上付近に位置していた古墳の調査を開始した。10 月 16 日には、みやこ町立犀川小学校の３年生 24 人が地域学習の一環で現地見学に訪れたため、調査担当者が対応し、遺跡の概要について説明を行った。その後、墳丘部分の掘削が一段落したため、10 月 21 日にドローンによる空中撮影を行った。空中撮影が終わった後、墳丘上ベルトの撤去および一部の古墳において石室石材の撤去を行い、可能な限り石室掘方や地山整形面の検出に努めた。11 月７日に全ての機材を撤収し、調査を終了した。

また、調査期間中には、小嶋篤技術主査（現：京都橘大学）から古墳の石室形態や墳丘の築造方法等に関して、助言を得た。

３．調査の組織

令和６（2024）年度の発掘調査と令和７（2025）年度の整理・報告に関わる関係者は以下の通りである。

	令和６年度	令和７年度
福岡県教育委員会		
教育長	寺崎雅巳	寺崎雅巳
副教育長	上田哲子	松永一雄
理事兼教育総務部長		田中直喜
教育総務部長	松永一雄	
九州歴史資料館		
館長	城戸秀明（R6.4.30 まで）	吉田法稔
	吉田法稔（R6.5.1 から）	
副館長	吉村靖徳	小宮春光
総務室長	山下雄二	野美山智美
総務班長	岡本裕子	岡本裕子
事務主査	徳永裕美	徳永裕美
	池松幸一郎	池松幸一郎
主事	原口美紀	髙畑桃子
埋蔵文化財調査室長	吉田東明（調査）	吉田東明
埋蔵文化財調査室長補佐	入佐友一郎	入佐友一郎
文化財調査班長	進村真之（調査）	進村真之
企画主査	坂本真一	坂本真一
技師	出見優人（調査）	出見優人（整理・報告）

酷暑の中、作業に従事していただいた発掘作業員の方々をはじめ、京築県土整備事務所道路課、みやこ町歴史民俗資料館、みやこ町中央公民館、京都森林組合など多くの方々のご協力によって、円滑に調査を進めることができた。ここに記して感謝申し上げる。

Ⅱ　位置と環境

１．地理的環境

久富古墳群は、福岡県の北東部に位置する京都郡みやこ町に所在する。現在のみやこ町は、平成18年3月20日に勝山町、犀川町、豊津町が合併し、成立した。町域の東側は行橋市・築上郡築上町、西側は田川郡香春町・添田町・赤村、南側は大分県中津市、北側は北九州市に接しており、面積は約151㎢で、福岡県下の町では最大の面積を誇る。町内には、英彦山を源流とする今川・祓川と平尾台を源流とする長峡川が流れ、周防灘に向かって注いでいる。町の北部と南部は急峻な山々に囲まれるが、北東部には河川によって開析された河成段丘や沖積平野が広がる。

２．歴史的環境

旧石器時代

後期旧石器時代の遺構が明確に確認された遺跡は未確認であるが、ナイフ形石器や台形様石器など後期旧石器時代の石器が出土した遺跡が、京都平野周辺には点在している。例えば、行橋市渡築紫遺跡（C地区）では、水晶やチャート、黒曜石などを使用した石器が出土している。

縄文時代

縄文時代早期の遺跡としては、みやこ町自在丸遺跡や寺門遺跡などがある。自在丸遺跡では、押型文土器や石鏃、スクレイパーなどの石器が出土している。その後、前期から中期にかけての遺跡は少ないものの、縄文時代後期には河岸段丘上に集落が展開するようになる。縄文時代後期の集落遺跡である節丸西遺跡では、竪穴住居跡が28軒確認され、遺物としては、深鉢や浅鉢、注口土器などの土器、石鏃や石錘、石斧などの石器が確認されている。また、県営伊良原ダム建設に伴う一連の発掘調査では、縄文時代早期から晩期にかけての土器や石器などが出土しており、山間部における狩猟採集活動の痕跡が確認されている。

弥生時代

弥生時代前期初頭に位置づけられる遺跡としては、行橋市長井遺跡、辻垣畠田・長通遺跡などが挙げられ、辻垣畠田・長通遺跡では刻目突帯文土器と板付Ⅰ式の土器が伴出することが確認されている。また、苅田町葛川遺跡やみやこ町神手遺跡では、弥生時代前期に位置づけられる環濠集落が確認されている。その後、弥生時代前期後半から中期にかけては、行橋市前田山遺跡、下稗田遺跡などの大規模な拠点集落が長峡川西岸の丘陵上に展開し、その周辺に小規模な集落が点在するようなあり方を示す。みやこ町黒田エノヲ遺跡では、弥生時代後期の大型住居跡が確認されている。祓川右岸の河岸段丘上に位置するみやこ町徳永川ノ上遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の時期に属する墳墓群が造営され、舶載鏡や鉄器などの豊富な副葬品が出土している。

古墳時代

京都平野における古墳時代前期の古墳としては、苅田町石塚山古墳が著名である。石塚山古墳は、全長110mの大型前方後円墳で三角縁神獣鏡などが出土している。古墳時代中期には全長120mを超える前方後円墳である苅田町御所山古墳などが築造される。古墳時代後期に入ると、行橋市八雷古墳、みやこ町庄屋塚古墳・扇八幡古墳のような前方後円墳が京都平野北部に築造されるようになり、後期末にはみやこ町橘塚古墳や綾塚古墳のような大型円墳・方墳が築造される。京都平野南

部では、後期後半にみやこ町甲塚方墳や彦徳甲塚古墳などの大型円墳・方墳が築造され、祓川東岸では石室内に装飾を施す苅見大塚古墳が築造される。

またこの時期、今川流域の丘陵上には多くの群集墳・横穴墓群が築造され、行橋市竹並遺跡では横穴式石室を有する古墳と 1000 基を超える横穴墓群が確認されているほか、行橋市渡築紫古墳群では、密集して築造された古墳時代終末期の群集墳が確認されている。

古代

古代になると古墳の築造が終焉を迎え、各地域で古代寺院が建立されるようになる。京都平野周辺では、四王寺式伽藍配置が確認されている行橋市椿市廃寺、みやこ町木山廃寺、上坂廃寺などが建立された。そして、天平 13（741）年の国分寺建立の詔によって建立されたみやこ町豊前国分寺では、太宰府系や朝鮮系といった多様な系譜をひく古瓦が出土しており、当地域における仏教文化の受容過程を考える上で重要な遺跡である。

またこの時代、白村江の戦いに端を発する対外的緊張の激化により、西日本各地に防衛拠点としての古代山城が築かれ、当地域においても行橋市御所ヶ谷神籠石が築かれた。

律令制下における地域支配拠点となった官衙に関連する遺構としては、みやこ町で豊前国府跡が確認されているほか、行橋市福原長者原官衙遺跡では、豊前国府跡に先行する時期の大規模な官衙的性格をもった建物跡が確認されている。また、行橋市延永ヤヨミ園遺跡では、大型の掘立柱建物跡が確認されており、古代の港湾施設である「草野津」推定地に近接していることから、古代の港湾管理施設の可能性が指摘されている。

【主要参考文献】

勝山町 2006『勝山町史』上巻　勝山町史編纂委員会

九州歴史資料館 2014『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』11　九州歴史資料館

九州歴史資料館 2015『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』17　九州歴史資料館

犀川町 1994『犀川町誌』　犀川町誌編集委員会

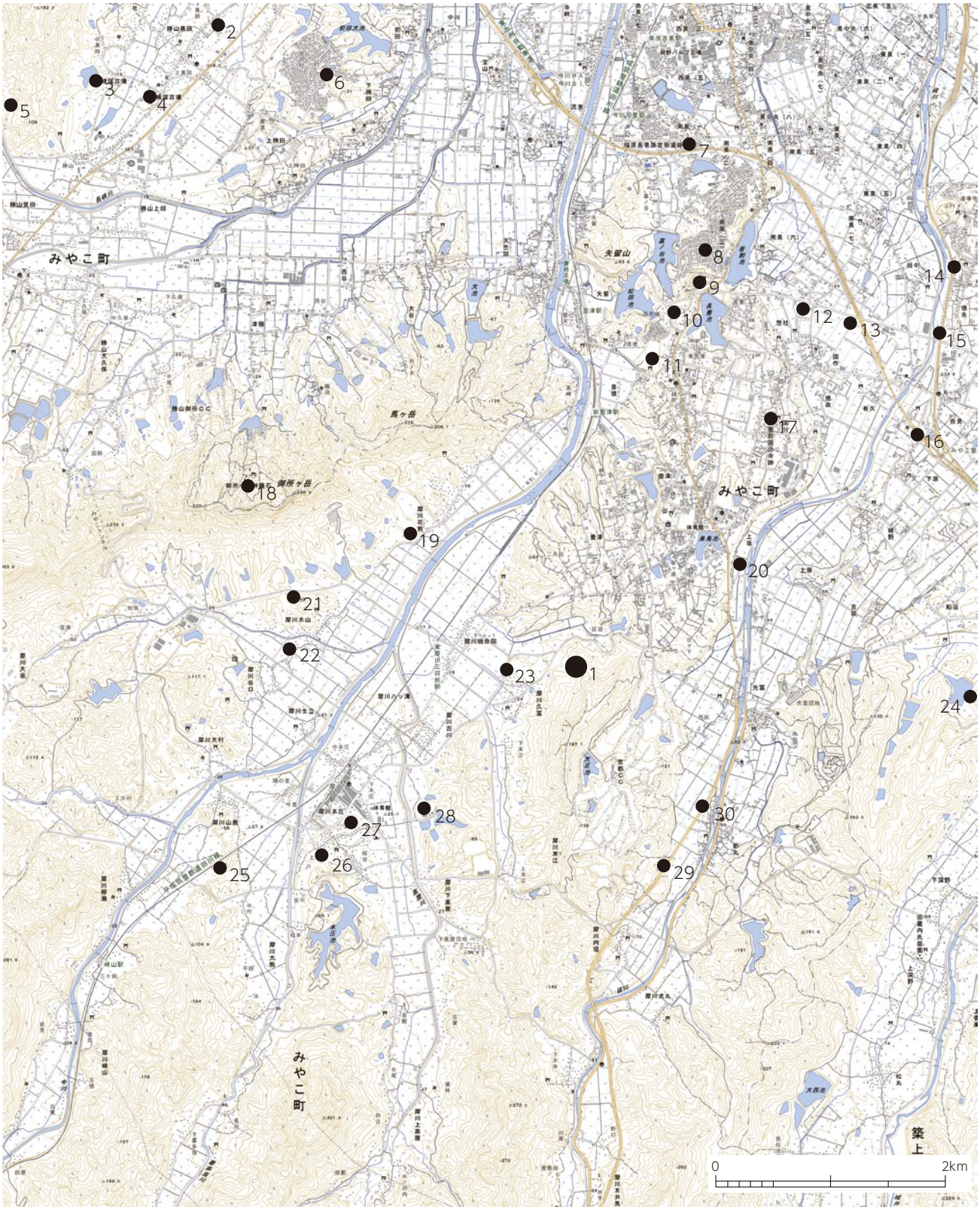
犀川町教育委員会 1992『城井遺跡群』　犀川町文化財調査報告書第３集

豊津町 1985『豊津町誌』　豊津町誌編纂委員会

行橋市 2004『行橋市史』上巻　行橋市史編纂委員会

行橋市教育委員会 2014『渡築紫古墳群』　行橋市教育委員会

みやこ町教育委員会 2024『節丸西遺跡』　みやこ町文化財調査報告書第 25 集



1 久富古墳群　2 庄屋塚古墳　3 綾塚古墳　4 橘塚古墳　5 清地神社南古墳群　6 下稗田遺跡　7 福原長者原官衙遺跡
8 竹並遺跡　9 八景山山麓古墳群　10 甲塚方墳　11 彦徳甲塚古墳　12 豊前国府跡　13 京ヶ辻遺跡　14 居屋敷遺跡
15 徳永川ノ上遺跡　16 呰見大塚古墳　17 豊前国分寺跡　18 御所ヶ谷神籠石　19 三ツ塚古墳群　20 上坂廃寺
21 宮ノ谷北古墳群　22 木山廃寺　23 辻垣遺跡　24 船迫窯跡　25 大熊古墳　26 本庄古墳　27 犀川小学校校庭遺跡
28 古川平原遺跡　29 北垣古墳群　30 節丸西遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

Ⅲ　調査の記録

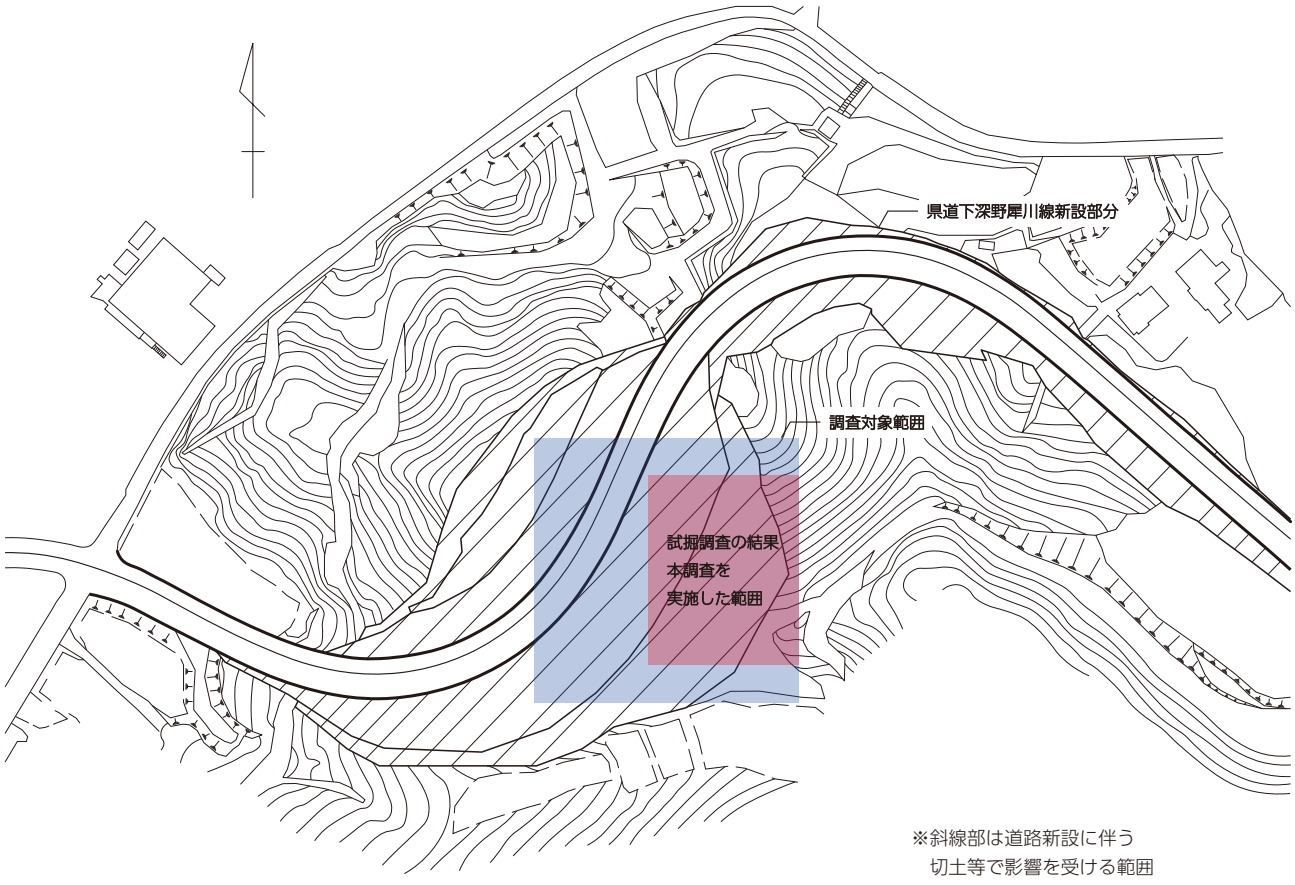
1．遺跡の概要

久富古墳群は、蔵持山（標高 472m）から北に向かって延びる、標高 60m 前後の丘陵上に位置している。西側に今川、東側に祓川が流れ、それぞれの川によって形成された低地が広がっている。西側の低地部分には弥生時代の遺跡である辻垣遺跡が分布している。

調査区内の堆積土は、地山が白色砂粒（風化花崗岩か）を含む赤褐色土で、その上に黄褐色土および黒褐色土が堆積する。

調査区の位置は以下のとおりである（図３）。県道下深野犀川線の道路改良工事に伴う切土により、影響を受ける部分を調査対象地とし、人力によるトレンチ掘削によって本調査を要する範囲を絞り込んだ。調査範囲の一部は工事により影響を受ける範囲から外れているものの、古墳の墳丘および周溝の一部が残り、将来的に道路の維持管理に支障をきたすと想定されることから、今回の調査範囲に含めることとした。

遺構としては、古墳時代終末期の古墳４基と小石室２基、中世のピットが確認された。遺物は、古墳の玄室内部、前庭部、墓道の埋土などから須恵器や中世の土師器、瓦器などが出土している。



第３図　調査区位置図（1/2,000）



第４図　久富古墳群遺構配置図（1/600）

２．遺構と遺物

本節では、今回の調査で確認した遺構と出土した遺物についての報告を行う。

２－１．古墳

１号墳（第５～ 11 図、図版２・４～６・15・16）

（１）位置と現状

１号墳は、本古墳群の中で最も東側に位置し、標高 62 ～ 63 mの緩斜面上に築造される古墳である。調査前は山林であったものの、墳丘の高まりや周溝の存在が確認でき、石室入口もわずかに開口していたため、横穴式石室を主体部にもつ古墳であると判断した。

（２）墳丘

墳丘の調査では、主体部の主軸に合わせたトレンチと主軸に直行するトレンチの計２本を設定し、土層を確認した上でベルトを残して、墳丘盛土を除去した。墳丘規模は、周溝下端部からの計測により、直径約６mの小規模な円墳であると判断される。周溝は墳丘の周囲を馬蹄状に巡り、遺存状態が良い場所での計測値は、幅約 80cm、深さ約 50cm である。隣接する２号墳の周溝を切るような形で掘削されるため、２号墳よりも後に１号墳が築造されたことが確認された。

地山整形

墳丘基底面の造成および周溝の掘削が行われた後、中央部に石室掘方を掘削したと考えられる。

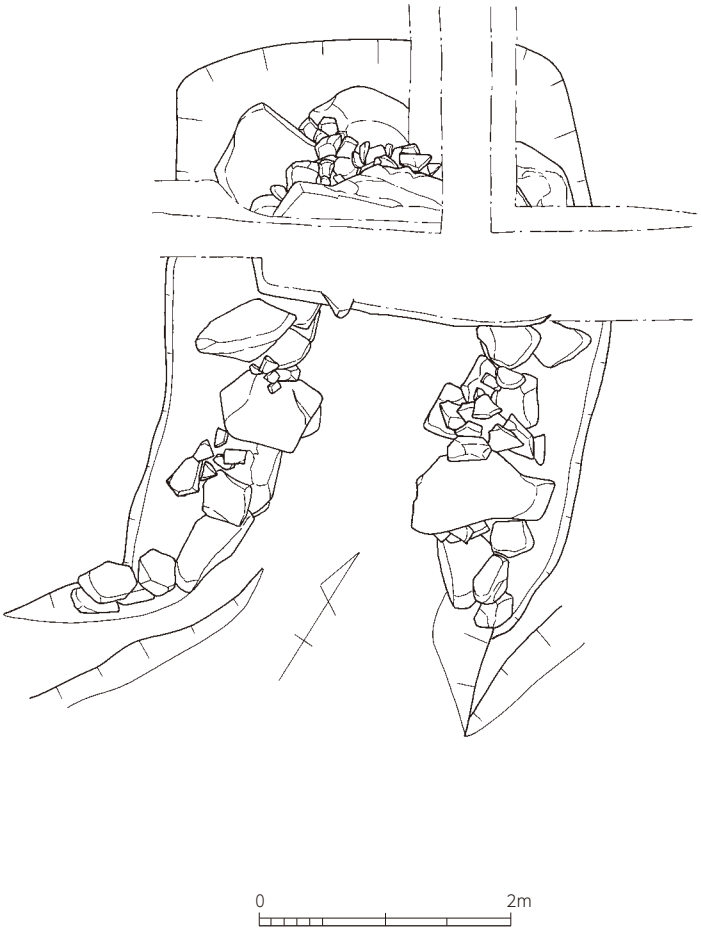
盛土

石室掘方を埋め戻した後、黄褐色砂質土と地山由来の赤褐色粘質土を交互に積む。墳丘北側に設定したベルトに関しては、比較的細かい単位で盛土がなされているのに対し、墳丘西側のベルトに関しては、盛土の単位が粗い。

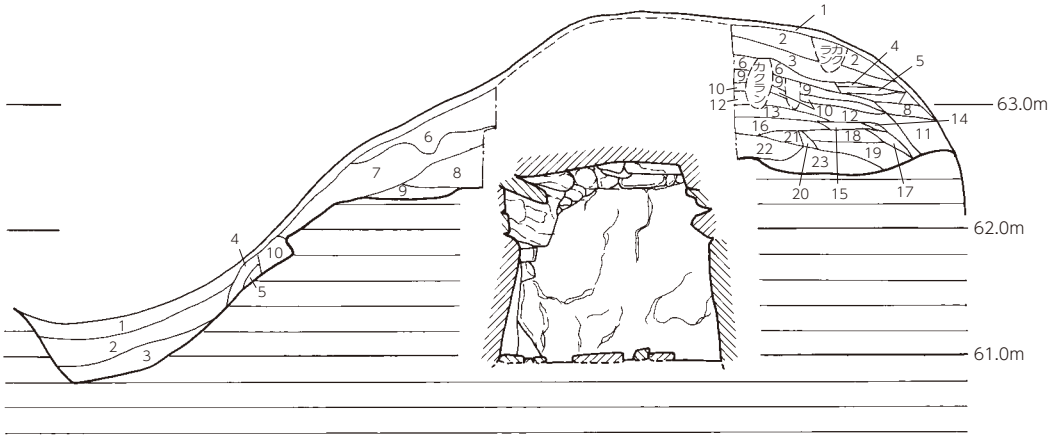
（３）埋葬施設

玄室

奥壁幅約 170cm、玄室長約 240cm、高さ約 150cm を

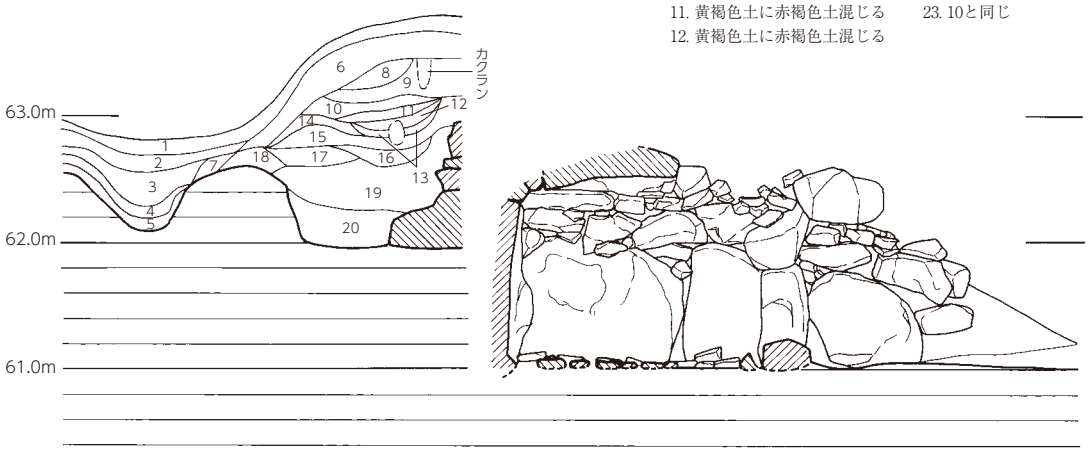


第５図　久富１号墳平面・掘方実測図（1/60）



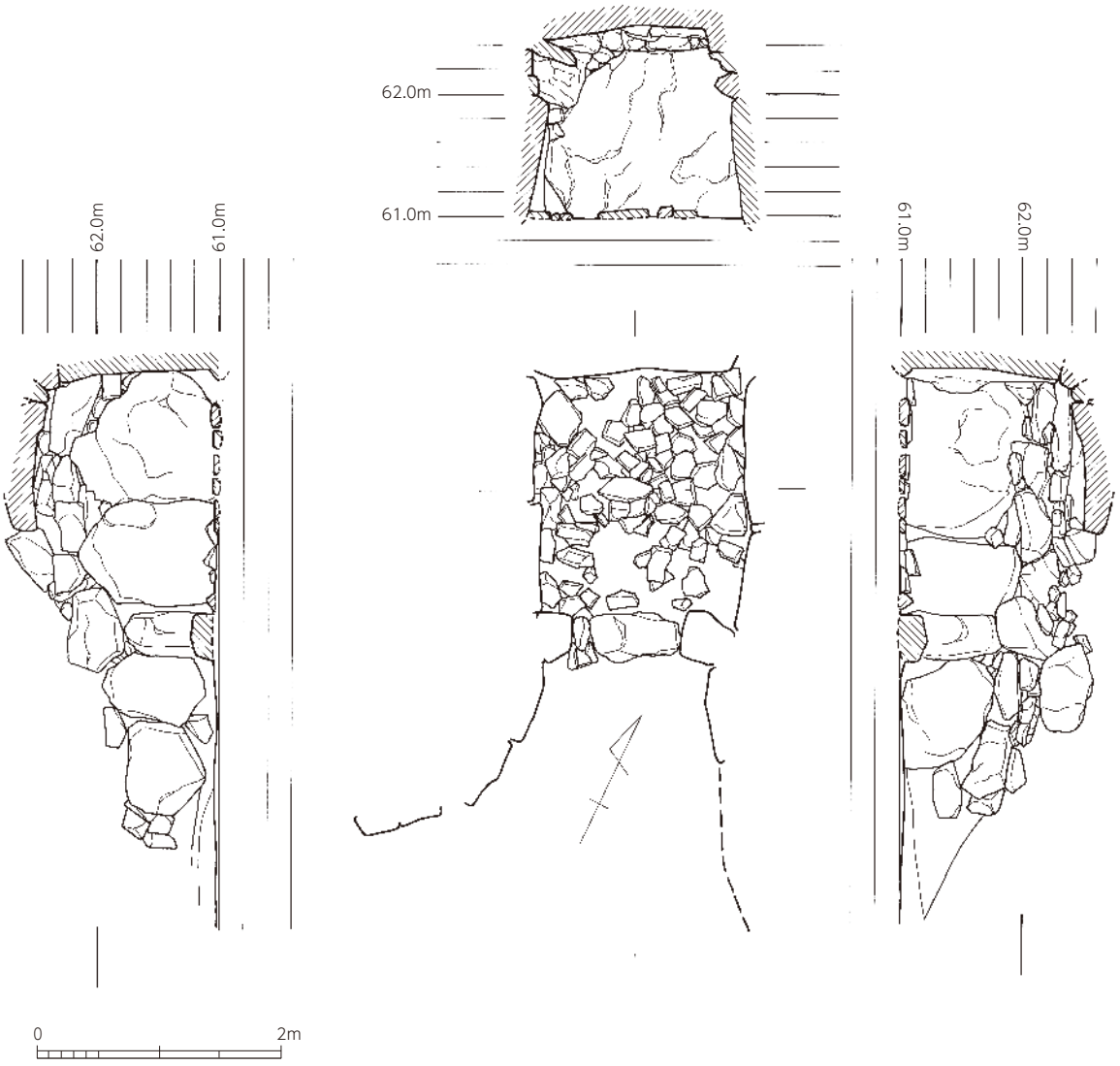
1号墳 墳丘西側
1. 表土
2. 黄褐色土に黒褐色土混じる
3. 黄褐色土
4. 6の流れ込み
5. 7の流れ込み
6. 黄褐色土に黒褐色土混じる
7. 赤褐色土（白色砂粒含む）
8. 黄褐色土に黒褐色土混じる
9. 赤褐色土に黒褐色土混じる
10. 赤褐色土

1号墳 墳丘東側
1. 表土
2. 赤褐色土
3. 赤褐色土（白色砂粒含む）
4. 赤褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土に赤褐色土混じる
7. 黄褐色土に赤褐色土混じる
8. 赤褐色土
9. 黄褐色土に赤褐色土混じる
10. 9と同じ（赤褐色土少ない）
11. 黄褐色土に赤褐色土混じる
12. 黄褐色土に赤褐色土混じる
13. 黄褐色土
14. 赤褐色土
15. 黄褐色土
16. 10と同じ
17. 赤褐色土
18. 11と同じ（赤褐色土多い）
19. 18と同じ
20. 黄褐色土
21. 18と同じ
22. 10と同じ
23. 10と同じ



1号墳 墳丘北側
1. 表土
2. 黄褐色土に黒褐色土混じる
3. 2と同じ（黒褐色土少ない）
4. 黄褐色土に赤褐色土混じる
5. 4と同じ（白色砂粒含む）
6. 黄褐色土
7. 6の流れ込み
8. 4と同じ（赤褐色土少ない）
9. 黄褐色土に赤褐色土混じる
10. 黄褐色土に赤褐色土混じる
11. 黄褐色土に赤褐色土混じる
12. 4と同じ（赤褐色土多い）
13. 12と同じ
14. 12に黒褐色土混じる
15. 14と同じ
16. 14より黒褐色土多い
17. 黒褐色土に赤褐色土混じる（赤褐色土少ない）
18. 5と同じ
19. 18より白色砂粒多く含む
20. 19と同じ

第6図　久富1号墳墳丘土層図（1/60）



第７図　久富１号墳石室実測図（１/60）

測り、玄室平面プランは長方形である。

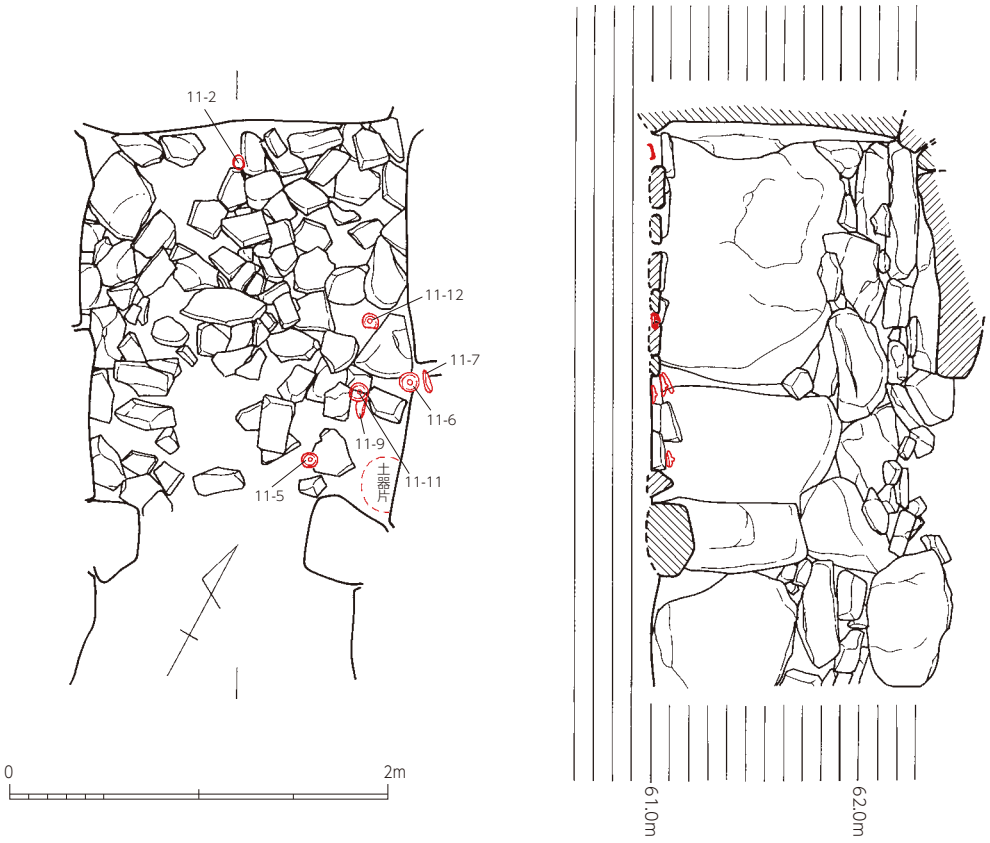
奥壁基底部には幅約 160cm、高さ約 130cm の大型石材を使用し、天井石との間に小型～中型の板状石材を充填する。側壁に関しては、両側壁の基底部に大型の石材を 2 個使用し、天井石との間には中型の長方形石材を横位に配し、隙間に小型の石材を充填する。天井部には、幅約 160cm、長さ約 110cm の大型の石材を使用している。両側壁において、石材の高さは概ね一致し、目地を揃えて石材が積まれている。

玄門部は両袖で、袖石は高さ約 80cm を測り、長方形を呈する。玄門部の幅は約 90cm で、袖石の間には楣石を据える。袖石の上側に側壁が積まれ、前庭部へと続く。

床面については、玄室奥壁から袖石の手前にかけて 30cm 程度の割石が敷かれており、割石の直下には地山が確認された。

前庭および墓道

明確な羨道を持たず、玄室のすぐ外に前庭部を設ける。基底部の石材は袖石から連続して配置され、「ハ」字状に開く。右側壁側は途中から石材を配置せず、地山の削り出しによって整形された基底部のみが確認される。墓道については、前庭部のすぐ南側に巨木が立っていたために全体を掘削できていないが、南西方向に屈曲しながら伸びていくものと想定される。



第８図　久富１号墳玄室遺物出土状況図（１/40）

（4）遺物（第 11 図、図版 15・16）

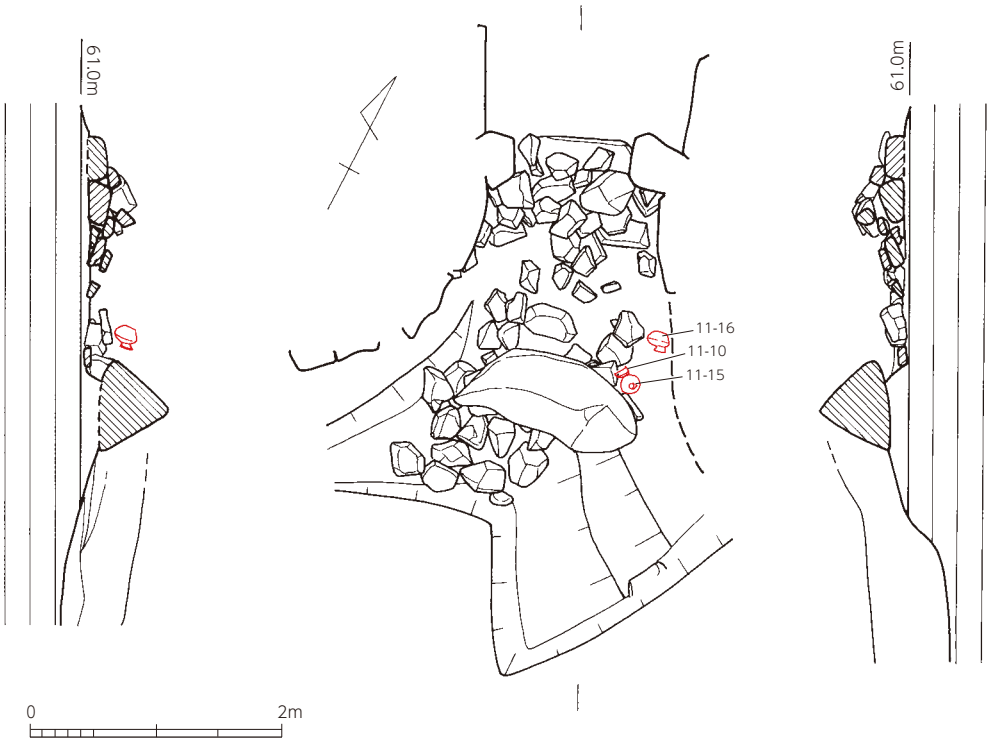
遺物出土状況

玄室内部から出土した須恵器（第 11 図 5 ～ 7 ・ 9 ・11・12）については、右側壁の袖石付近からまとまって出土した。前庭部からは杯蓋・平瓶（第 11 図 10・15・16）が出土した。

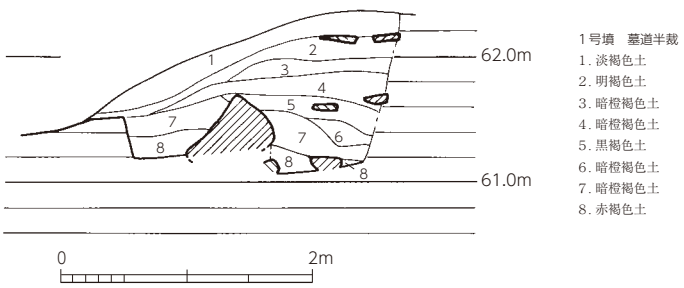
遺物

須恵器杯蓋（第 11 図 1 ～ 12）

1 ～ 12 は須恵器の杯蓋である。この内、 5 ～ 12 については、宝珠形のつまみを有する。 1 は、復元口径 9.2cm、器高 3.6cm で、肩部に浅い沈線が入る。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。 2 は、口径 9.4cm、器高 2.8cm で、肩部に沈線が入る。



第９図　久富１号墳前庭部実測図（１/60）



第 10 図　久富１号墳前庭部土層図（１/60）

1同様、天井部外面は回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。3は、杯蓋の破片で全体の2分の1程度が残存している。復元口径9.6cmで、肩部に浅い沈線が入る。全体に回転ヨコナデによる調整を施す。4も3同様に杯蓋の破片であり、全体の4分の1程度が残存する。復元口径10.0cmで、体部に回転ヨコナデによる調整を施す。5は完形で、口径8.4cm、器高2.5cmを測る。天井部外面に回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。6は完形で、口径8.2cm、器高2.5cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。7は完形で、口径8.8cm、器高2.3cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。8は完形で、口径8.8cm、器高2.4cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。9は、復元口径8.8cm、残存高2.2cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。10は完形で、口径8.8cm、器高2.2cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。11は完形で、口径8.8cm、器高2.3cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。12は完形で、口径8.6cm、器高2.3cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。

須恵器杯身（第11図13）

13は須恵器の杯身である。全体の4分の1程度が残存する。復元底径6.0cmで体部に沈線が入る。体部の側面は回転ヨコナデによる調整を施し、底部外面はヘラ切り後未調整。

須恵器高杯（第11図14）

14は須恵器の高杯脚部である。全体の4分の1程度が残存し、復元底径は7.6cmを測る。全体に回転ヨコナデによる調整を施す。

須恵器平瓶（第11図15・16）

15・16は須恵器の平瓶である。15は、頸部を欠損し、体部のみが残存する。残存高は6.6cmで、体部は回転ヨコナデによる調整を施し、底部はヘラ切り後未調整。体部上位にヘラ記号が入る。16は完形で、口径7.5cm、器高16.0cmを測る。口縁部から頸部にかけては回転ヨコナデによる調整を、体部上位から中位にかけてはカキメによる調整を施し、底部はヘラ切り後未調整。

土師器椀（第11図17・18）

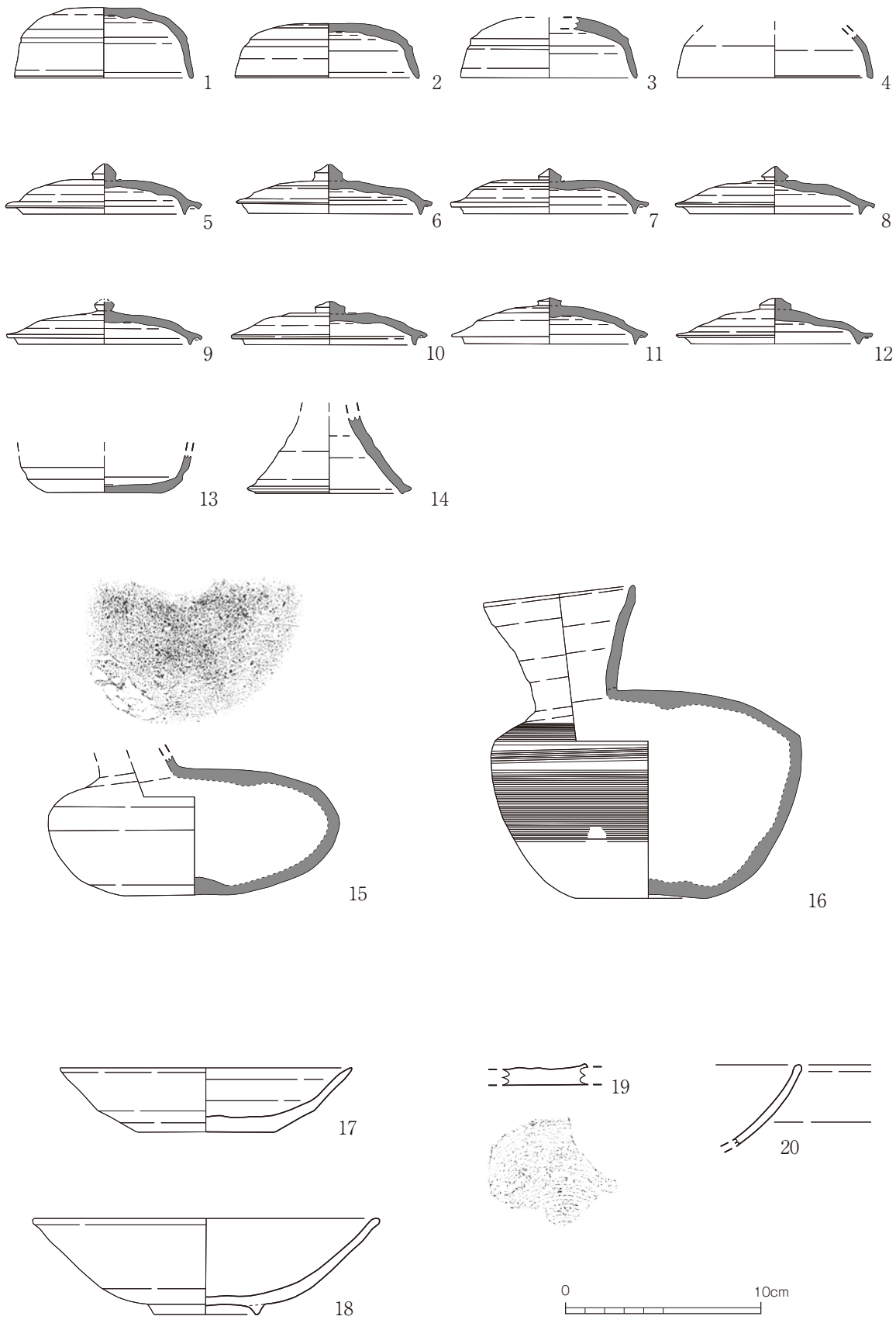
17・18は土師器の椀である。17は、全体の4分の1程度が残存し、復元口径15.2cm、復元底径7.2cmを測る。体部の中位に明瞭な稜を持ち、ナデによる調整を施す。18は、全体の4分の1程度が残存し、復元口径17.6cm、復元底径5.4cmを測る。底部に、断面逆三角形の高台を貼り付け、体部にはナデによる調整を施す。

土師器皿（第11図19）

19は土師器の皿である。底部の破片で外面に糸切り痕が残る。

瓦器椀（第11図20）

20は瓦器椀である。口縁部から体部にかけての破片で、口縁端部を丸く仕上げる。



第 11 図　久富 1 号墳出土遺物実測図（1 / 3）

２号墳（第 12 ～ 15 図、図版２・７・８・16）

（1）位置と現状

２号墳は、１号墳の西側に隣接する古墳で、標高 61 ～ 62m の緩斜面上に築造される。調査前は山林で、墳丘が削平されて石室の石材が露出し、天井石の一部が崩落した状態で確認された。

（2）墳丘

墳丘の調査は主体部の主軸に合わせたトレンチと主軸に直行するトレンチの計２本を設定し、土層を確認した上でベルトを残して、墳丘盛土を除去した。なお、主軸に直交するベルトについては、隣接する１号墳の周溝との切り合い関係を確認するために、１号墳のベルトと連続する形で設定している。墳丘の東側については周溝が１号墳の周溝に切られ、西側については一部削平を受けているため、２号墳の周溝については明確に検出できていないものの、墳丘北側の土層の観察結果から墳丘の規模は約６m と推測される。

地山整形

１号墳ほど明瞭に確認できていないものの、墳丘基底面の造成および周溝の掘削が行われた後、中央部に石室掘方を掘削したと考えられる。

盛土

赤褐色土によって石室掘方を埋め戻した後、黄褐色砂質土と地山由来の赤褐色粘質土を交互に積み、盛土の単位は非常に細かい。

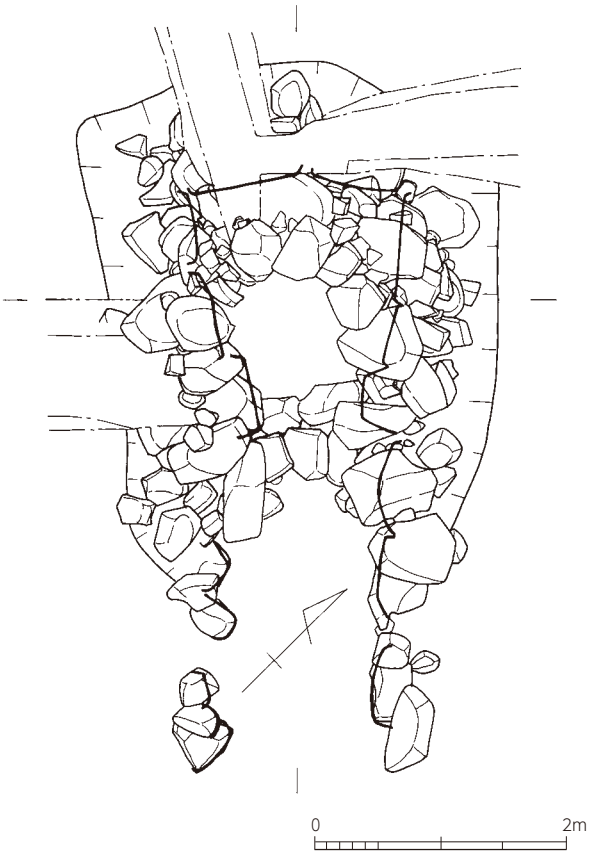
（3）埋葬施設

玄室

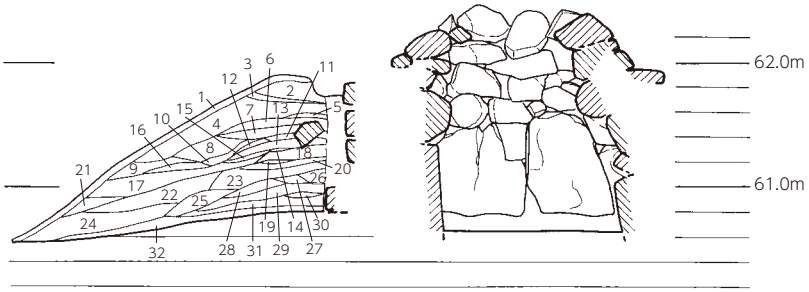
奥壁幅約 160cm、玄室長約 210cm、高さ約 140cm を測り、玄室平面プランは、袖部に向かって徐々に幅が狭まる羽子板形である。

奥壁基底部には２個の石材を使用し、左側の石が幅約 80cm、高さ約 70cm、右側の石が幅約 70cm、高さ約 80cm を測る。２段目からは小型～中型の石材を中央に向かって内傾しながら持ち送りしている。側壁に関しては、両側壁の基底部に大型の石材を２個使用し、２段目からは中央に向かって内傾しながら持ち送りしている。天井石の一部が崩落しているものの、天井部の形状は穹窿（きゅうりゅう）状（ドーム状）になると想定される。

玄門部は両袖で、袖石は左袖石が高さ約 90cm、右袖石が高さ約 80cn を測り、長方形を呈する。玄

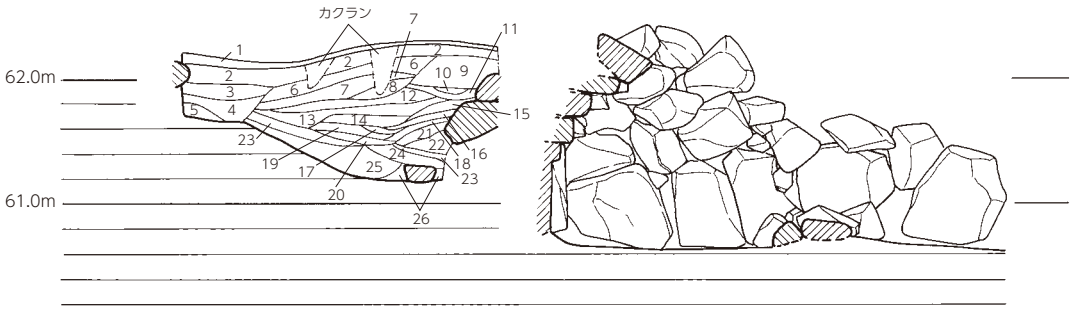


第 12 図　久富２号墳平面・掘方実測図（1/60）



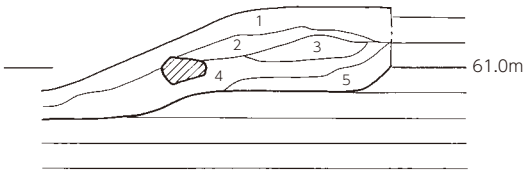
2号墳 墳丘西側

1. 表土
2. 赤褐色土
3. 黄褐色土
4. 赤褐色土
5. 黄褐色土
6. 赤褐色土に黄褐色土混じる
7. 黄褐色土
8. 赤褐色土に黄褐色土混じる
9. 赤褐色土
10. 黄褐色土
11. 黄褐色土
12. 赤褐色土
13. 赤褐色土に黄褐色土混じる
14. 黄褐色土
15. 黄褐色土
16. 赤褐色土
17. 赤褐色土
18. 赤褐色土に黄褐色土混じる
19. 黄褐色土
20. 赤褐色土に黄褐色土混じる
21. 黄褐色土
22. 赤褐色土に黄褐色土混じる
23. 赤褐色土に黄褐色土混じる
24. 赤褐色土に黄褐色土混じる
25. 赤褐色土に黄褐色土混じる
26. 黄褐色土
27. 赤褐色土
28. 黄褐色土
29. 赤褐色土に黄褐色土混じる
30. 赤褐色土
31. 赤褐色土に黄褐色土混じる
32. 黄褐色土



2号墳 墳丘北側

1. 表土
2. 堆積土(黄褐色土)
3. 黒褐色土
4. 黄褐色土に黒褐色土混じる
5. 赤褐色土
6. 黄褐色土
7. 黄褐色土
8. 赤褐色土
9. 赤褐色土
10. 黄褐色土
11. 黄褐色土
12. 赤褐色土に黄褐色土混じる
13. 黄褐色土
14. 赤褐色土に黄褐色土混じる
15. 赤褐色土
16. 黄褐色土
17. 黄褐色土
18. 赤褐色土
19. 赤褐色土に黄褐色土混じる
20. 赤褐色土に黄褐色土混じる
21. 赤褐色土に黄褐色土混じる
22. 赤褐色土
23. 赤褐色土に黄褐色土混じる
24. 赤褐色土に黄褐色土混じる
25. 赤褐色土
26. 黄褐色土



2号墳 前庭部半裁

1. 暗茶褐色
2. 黄褐色土
3. 橙褐色土
4. 橙褐色土
5. 黒褐色土



第 13 図　久富 2 号墳墳丘・前庭部土層図（1/60）



第 14 図　久富 2 号墳石室実測図（1/60）

門部の幅は約80cmで、袖石の間には楣石を据える。袖石の上の石材は、調査時点で崩落していたが、袖石の上に数段石を積み、前庭部へ続くものと想定される。

床面については、敷石等は確認されなかった。

前庭および墓道

明確な羨道は持たずに、玄門のすぐ外に前庭部を設ける。基底部の石材は袖石から連続的に配置されるが、１号墳とは異なり、直線的に石が配列される。墓道については、途中で重機の搬入路に切られ、全面を掘削できていないものの、屈曲しながら南西方向に伸びることが確認できた。

（4）遺物（第 15 図、図版 16）

遺物出土状況

攪乱を受けており、出土状況が明確でないものがほとんどであるが、前庭部の埋土から出土したものが多い。

遺物

須恵器杯蓋（第 15 図１・２）

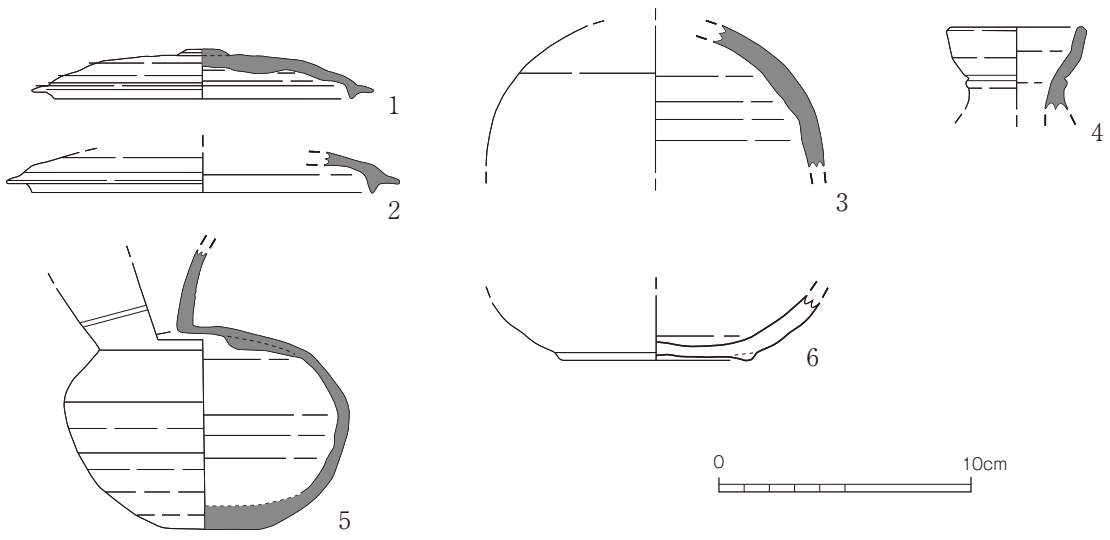
１・2 は須恵器の杯蓋である。１は復元口径 10.8cm、器高 2.0cm で、全体の２分の１程度が残存している。押しつぶしたような扁平なつまみがつく。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は回転ヨコナデのち不定方向ナデ、その他の箇所は回転ヨコナデによる調整を施す。２は口縁部付近の破片で全体の６分の１程度が残存する。復元口径は 13.6cm で、回転ヨコナデによる調整を施す。

須恵器壺（第 15 図３・４）

３・４は須恵器の壺である。３は胴部片で、回転ヨコナデにより丁寧に仕上げる。４は壺の口縁部片と想定され、外面中位に沈線が１条巡る。内外面ともに回転ヨコナデによる調整を施す。３と４は接合しないものの、同一個体である可能性がある。

須恵器平瓶（第 15 図５）

５は須恵器の平瓶で、口縁部が欠損している。頸部に沈線が１条巡る。胴部上位から中位にかけて回転ヨコナデ、胴部中位から下位にかけて回転ヘラケズリによる調整を施す。



第 15 図　久富２号墳出土遺物実測図（1 / 3）

瓦器椀（第 15 図６）

６は瓦器椀である。底部から胴部の破片で、底部には高台が付く。高台については、粘土紐を貼り付けたような粗雑な作りである。内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。

３号墳（第 16 ～ 19 図、図版３・９・10・17）

（１）位置と現状

３号墳は、２号墳の北西側に隣接する古墳で、標高約 63m の緩斜面上に築造される。調査前は山林で、墳丘と石室の大部分が削平され、基底部の石材が露出した状態で確認された。

（２）墳丘

墳丘の調査は、主体部の主軸に合わせたトレンチと主軸に直行するトレンチの計２本を設定し、土層を確認した上でベルトを残して、墳丘盛土を除去した。調査時点で大幅な削平を受けており、墳丘盛土はほとんど残存していなかった。また、周溝についても土層断面からは確認することができなかった。

石室開口部付近には、石室から連続する形で左右に外護列石と思われる列石が確認された。墳丘の前面にのみ石が配列されることから、土留め等の役割があったものと想定される。

地山整形

墳丘基底面の造成が行われた後、中央部に石室掘方を掘削したと考えられる。

盛土

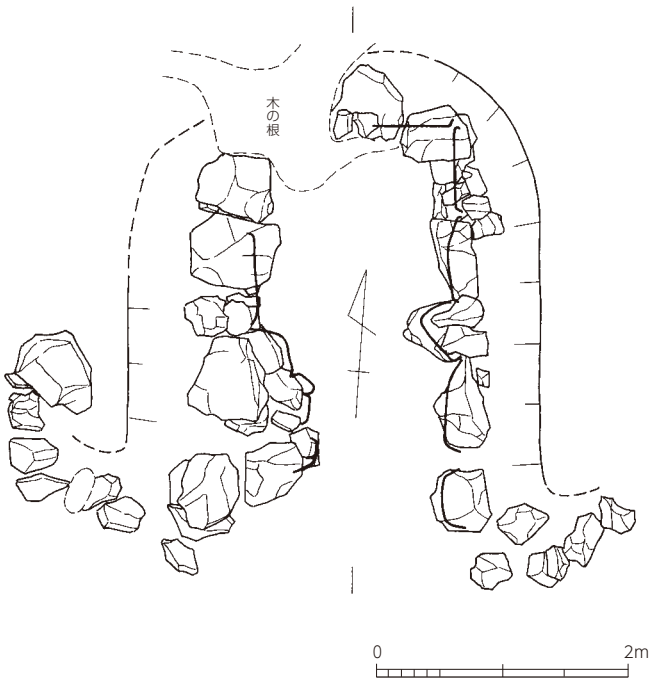
先述の通り、調査時点で墳丘が大幅に削平されており、墳丘盛土はほとんど残存していなかったものの、残存している部分から推測すると他の古墳同様に黄褐色土と地山由来の赤褐色土を交互に積み重ねて、墳丘を構築したものと考えられる。

（３）埋葬施設

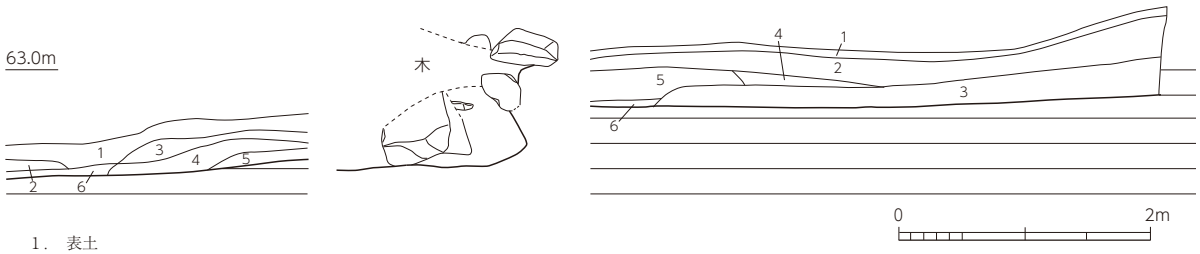
玄室

奥壁幅 160cm、玄室長 160cm を測り、玄室平面プランは正方形となる。石室の大部分が崩壊しており、奥壁の左側については巨木の根が入り込んでおり、図化することができなかった。玄室基底部の両壁には石材を２個ずつ使用しており、石材の大きさは 60 ～ 80cm、高さ 60cm である。

玄門部は両袖で、袖石は左袖石が高さ 60cm、右袖石は高さ 50cm を測り、どちらも長方形を呈する。玄門部幅は約 100cm であり、梱石は据えられていなかった。また、検出時に玄門部付近に中型の石材が配置



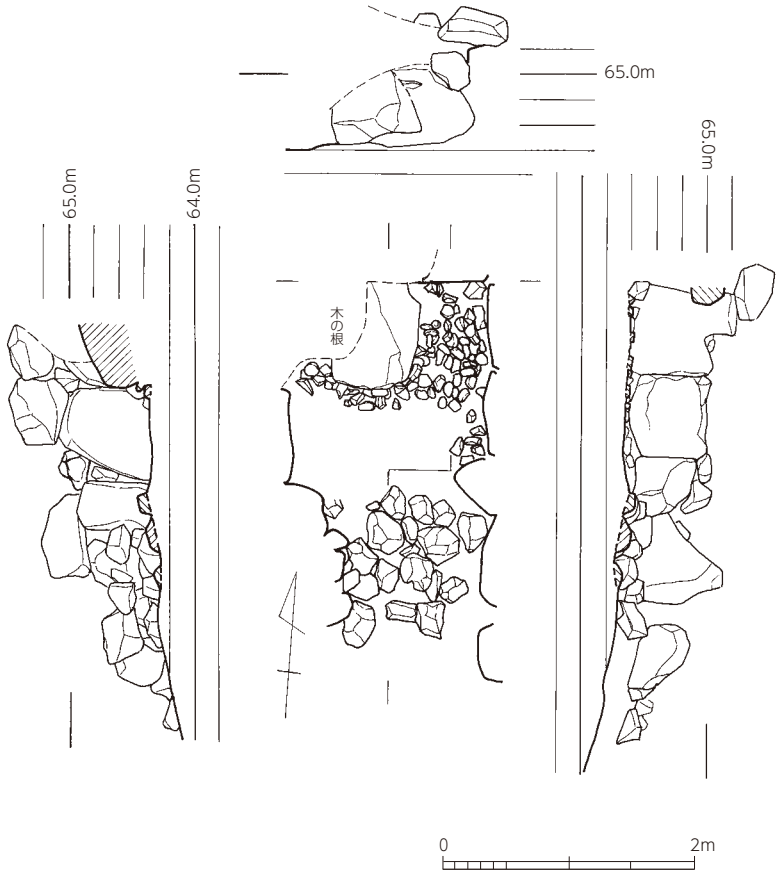
第 16 図　久富３号墳平面・掘方実測図（１/60）



1．表土
2．堆積土（黄褐色土）
3．赤褐色土（白色砂粒含む）
4．赤褐色土
5．橙褐色土
6．赤褐色土に黄褐色土混じる

1．赤褐色土
2．赤褐色土に黄褐色土混じる
3．赤褐色土に黄褐色土混じる
4．赤褐色土に黄褐色土混じる
5．赤褐色土に黄褐色土混じる
6．黄褐色土

第 17 図　久富３号墳墳丘土層図（1/60）



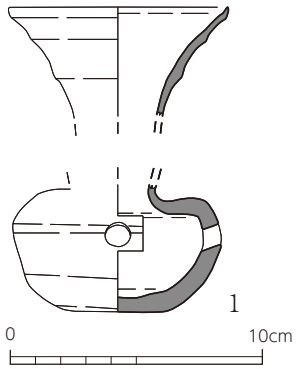
第 18 図　久富３号墳石室実測図（1/60）

されており、閉塞石の一部が残存していたものと想定される。

玄室床面の一部には小型の石材が散在しており、床面の敷石ないしは玄室の石材の隙間に充填されていた石材と考えられる。

前庭および墓道

１・２号墳同様に明確な羨道部を持たず、玄門部からすぐに前庭部へと続く。



第 19 図　久富３号墳出土遺物実測図（1/ 3）

（4）遺物（第 19 図、図版 17）

遺物出土状況

攪乱を受けており、出土状況が明確ではないが、石室埋土からは須恵器𤭯が出土している。

遺物

須恵器𤭯（第 19 図１）

１は須恵器の𤭯である。頸部は欠損しているが、口縁部と胴部が出土している。口径は 8.7cm を測り、胴部上位が若干焼き歪んでいる。内外面ともに回転ヨコナデによって仕上げるが、底部外面はヘラ切り後未調整である。

４号墳（第 20 ～ 22 図、図版３・11・12・17・18）

（1）位置と現状

４号墳は、１～３号墳からやや離れた、標高 58m 前後の丘陵西側斜面上に位置する。墳丘と石室の大部分が削平されており、石室石材の一部が露出した状態で確認された。

（2）墳丘

墳丘の調査は、主体部の主軸に合わせたトレンチと主軸に直行するトレンチの計２本を設定し、土層を確認した上でベルトを残して、墳丘盛土を除去した。調査時点で大幅な削平を受けており、墳丘盛土はほとんど残存していなかった。また、周溝についても土層断面からは確認することができなかった。

地山整形

墳丘基底面の造成が行われた後、中央部に石室掘方を掘削したと考えられる。

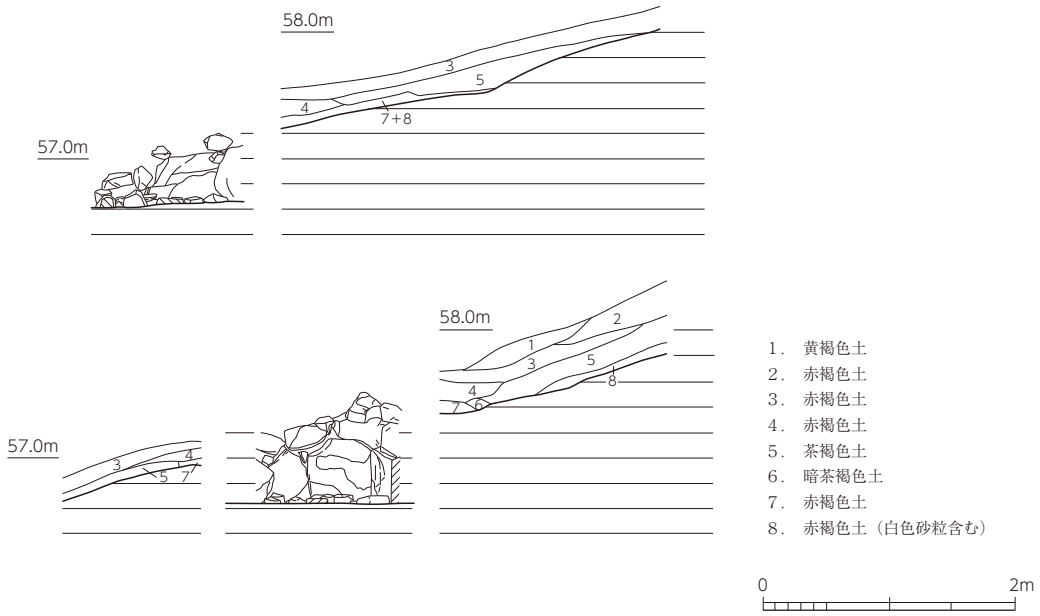
盛土

先述の通り、調査時点で墳丘が大幅に削平されており、墳丘盛土はほとんど残存していなかったものの、残存している部分から推測すると他の古墳同様に黄褐色土と地山由来の赤褐色土を交互に積み重ねて、墳丘を構築したものと考えられる。

（3）埋葬施設

玄室

奥壁幅約 100cm である。玄室長については左側壁が大破しているため、正確な大きさは不明であるが、右側壁の石材や床面に敷かれた石材の範囲から判断すると、全長 110cm 前後と想定され、玄室平面プランはおおよそ正方形になると想定される。先述した１～３号墳の石室に比べ、かなり小型の石室になる。



第 20 図　久富４号墳墳丘土層図（1 /60）

左側壁は大破していたため、詳細は不明であるが、今回調査した他の古墳同様、玄門部は両袖になると想定される。

玄室床面には、１号墳同様に割石が敷かれていた。

前庭および墓道

前庭部および墓道に関しては、調査前に設置された重機の進入路によって破壊されており、詳細は不明である。

（4）遺物（第 22 図、図版 17・18）

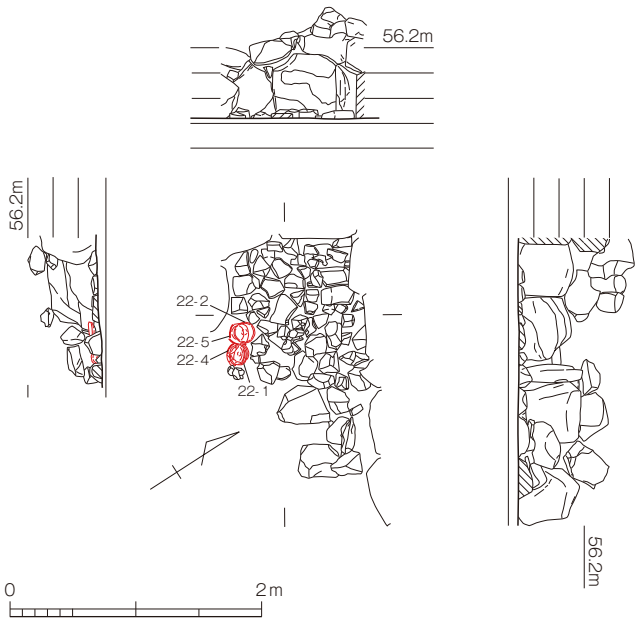
遺物出土状況

左側壁付近から須恵器杯蓋・杯身（第 22 図１・２・４・５）が出土し、右側壁の玄門部付近から須恵器杯蓋・杯身・平瓶（第 22 図３・６・７）が出土している。

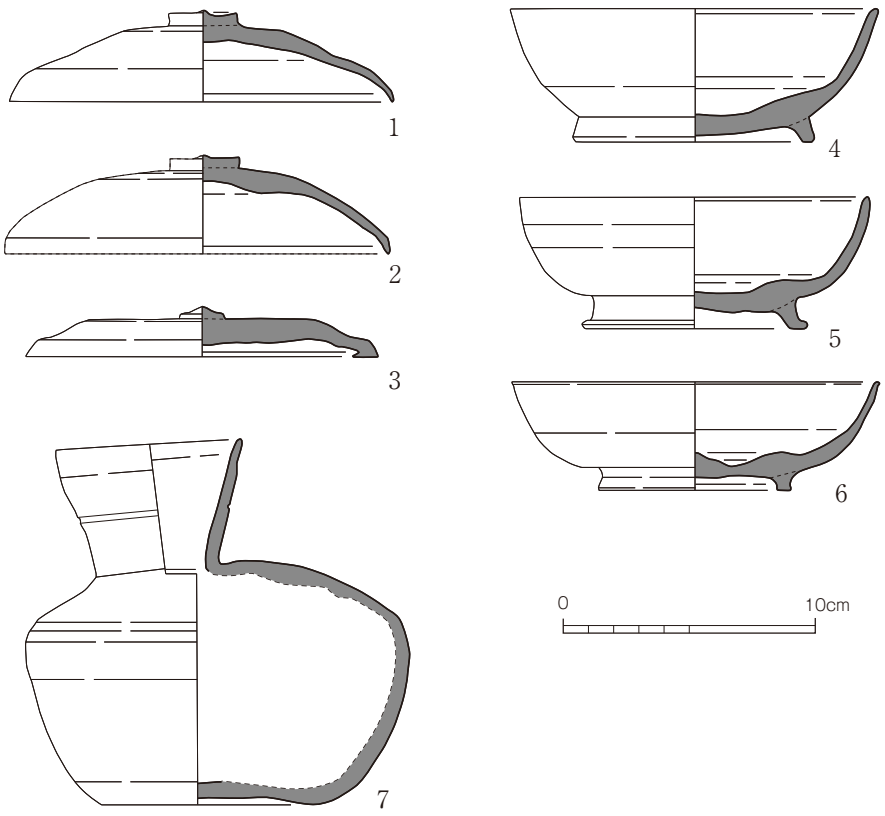
遺物

須恵器杯蓋（第 22 図１～３）

１～３は須恵器の杯蓋である。１は完形で、口径 15.3cm、器高 3.9cm を測る。口縁部にかえりを持たず、端部を下方に折り曲げる。天井部には押しつぶしたような、扁平な宝珠形つまみがつく。焼成不良のため、内外面ともに摩滅しているが、回転ヨコナデにより仕上げるものと想定される。２は全体の３分の２程度が残存しており、口縁部にはかえりを持たず、端部を下方に折り曲げる。天井部には１同様に扁平な宝珠形つまみがつく。焼成不良のため、内外面ともに摩滅しているが、回転ヨコナデにより仕上げるものと想定される。３は全体の３分の２程度が残存しており、口縁部にはかえりを持たず、端部は内側に折り曲げるような形状をしている。天井部にはつまみがつく。内外面ともに回転ヨコナデにより仕上げ、焼きが硬質であるものの、焼成不良または還元炎焼成を行っていないために、色調は橙色である。



第 21 図　久富 4 号墳石室実測図（1 /60）



第 22 図　久富 4 号墳出土遺物実測図（1 / 3）

須恵器杯身（第 22 図４～６）

４～６は須恵器の杯身である。４は全体の４分の３程度が残存しており、口径 14.6cm、底径 9.6cm、器高 5.3cm を測る。底部に付く高台は高く、外側に大きく開く。焼成不良のため、全体的に摩滅しているが、内外面ともに回転ヨコナデにより仕上げる。５は完形で、口径 14.0cm、底径 9.0cm、器高 5.2cm を測る。底部に付く高台は高く、外側に大きく開き、端部が外方に張り出す。６は全体の４分の３程度が残存しており、口径 13.5cm、底径 7.6cm、器高 4.3cm を測る。４、５ほど高台が高くならず、また外への開き方も弱い。内外面ともに回転ヨコナデにより仕上げる。

須恵器平瓶（第 22 図７）

７は須恵器の平瓶で、完形である。口径 7.5cm、器高 14.5cm を測り、頸部の中位に沈線が１条巡る。内外面ともに回転ヨコナデにより仕上げるが、底部外面はヘラ切り後未調整である。

２－２．小石室

１号小石室（第 23・24 図、図版３・13）

（１）位置と現状

１号小石室は３号墳の南西側、標高 60m 前後の緩斜面上に位置する。調査前は山林で、石材の一部が露出した状態で確認された。墳丘はもたない。

（２）埋葬施設

石室長は約 80cm、石室幅は最大で 45cm を測り、１～４号墳の石室と比較して、かなり小規模な石室となり、成人の伸展葬が不可能な大きさである。石室は、基本的に中型の石材を１段積んで構築されるが、墓道が伸びる南東側の壁は小型の石材を乱雑に積んでおり、横穴式石室の閉塞石を意識したような形となる。

床面には、平たい石材が敷かれ、平坦な面を形成する。

（３）遺物

１号小石室からは、遺物は出土していない。

２号小石室（第 25・26 図、図版３・13・14）

（１）位置と現状

２号小石室は４号墳の北西側すぐ近くに位置し、標高 57m 前後の緩斜面上に位置する。調査前は山林で、石材の一部が露出した状態で確認された。

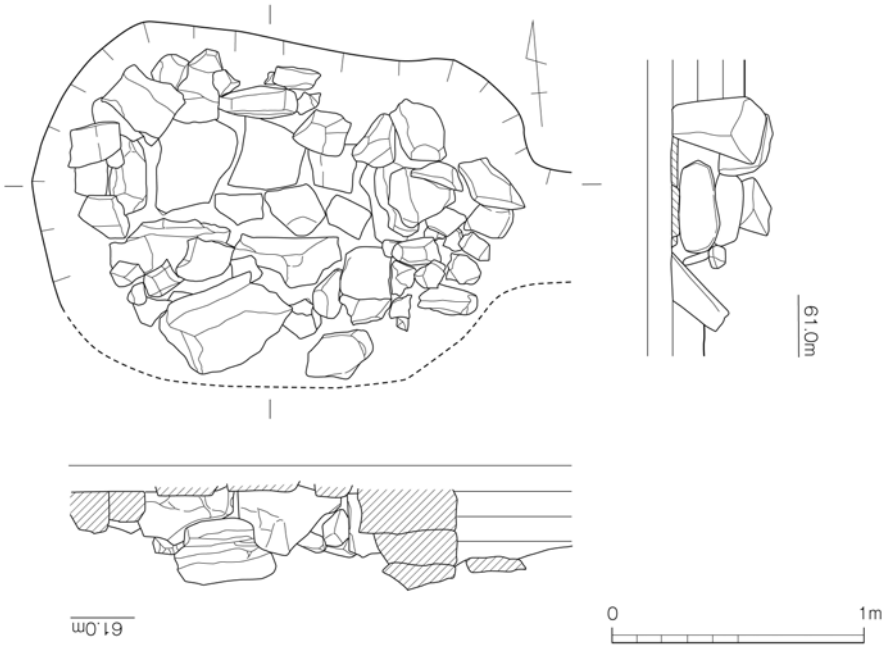
（２）埋葬施設

石室長は約 150cm、石室幅は最大で 35cm を測るが、検出時点で両側の壁面が内側に押し出されており、本来の幅はより広くなると考えられる。１号小石室と比較して、かなり長大な石室を持つ。石室構造については、１号小石室同様に基本的に中型の石材を１段積んで構築されるが、墓道が伸びる南東側の壁は小型の石材を乱雑に積んでおり、横穴式石室の閉塞石を意識したような形となる。

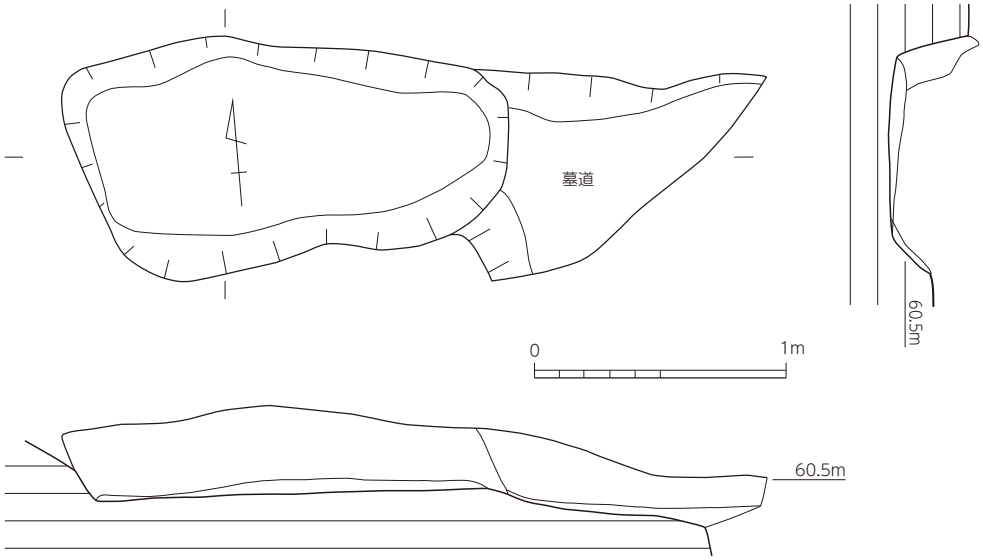
床面には、中型の角張った石材が敷かれ、平坦な面を形成しない。

（３）遺物

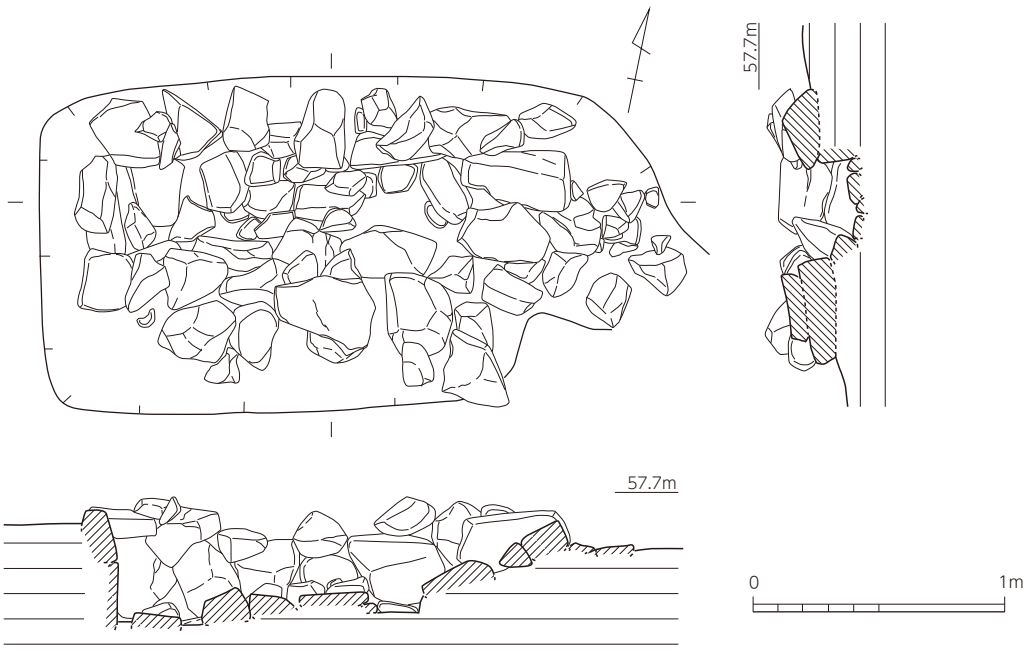
２号小石室からは、遺物は出土していない。



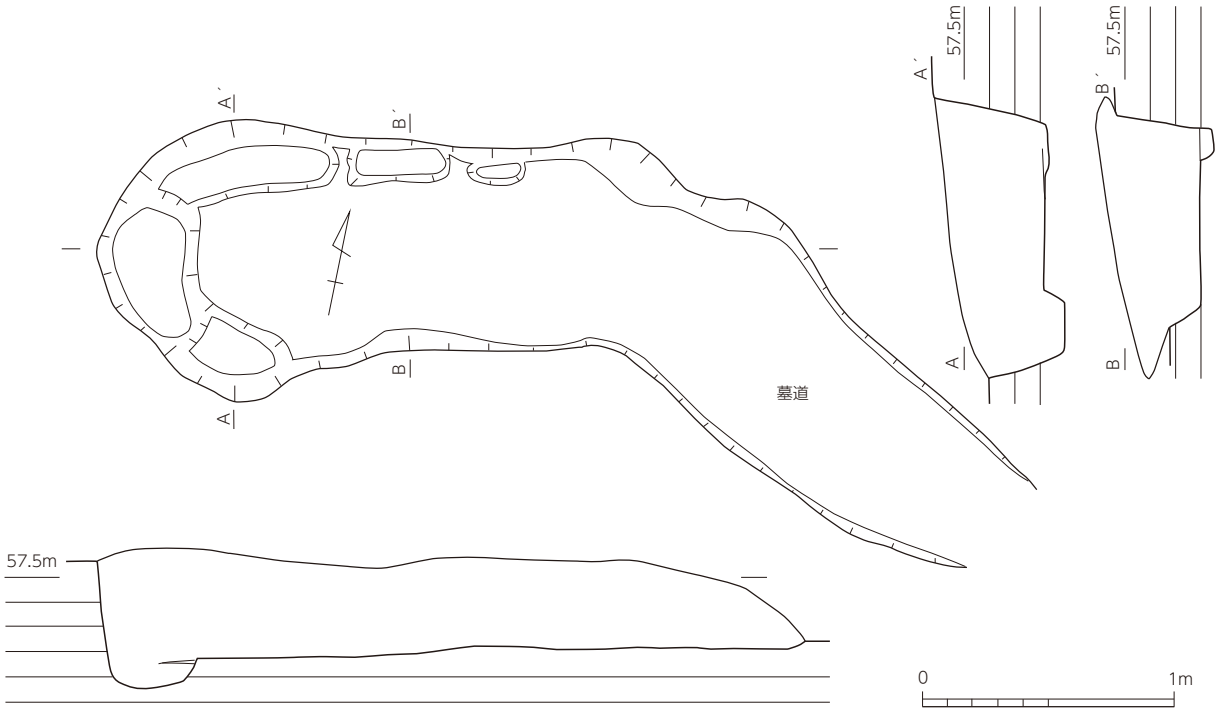
第 23 図　久富 1 号小石室石室実測図（1 /30）



第 24 図　久富 1 号小石室掘方実測図（1 /30）



第 25 図　久富 2 号小石室石室実測図（1 /30）



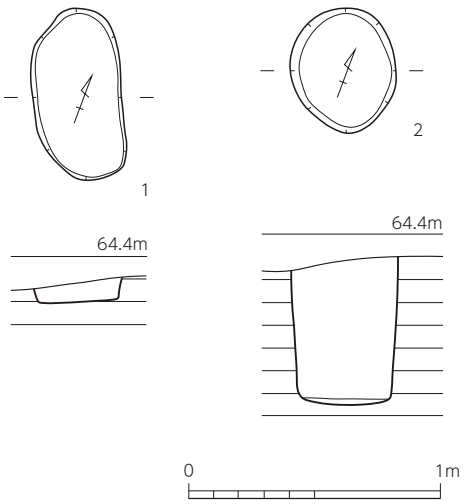
第 26 図　久富 2 号小石室掘方実測図（1 /30）

２－３．その他の遺構

ピット（第 27・28 図、図版 18）

標高約 64m の山頂付近にある地形の窪みに合わせて、トレンチを設定し、掘削を行ったところ、ピットと思われる遺構が２基確認された。

１は楕円形を呈し、最大長約 70cm、最大幅約 40cm、深さ約 10cm を測る。２は略円形を呈し、大きさは約 50cm、深さは一番深い部分で約 55cm を測る。なお、２については、埋土にしまりがなく、樹根の可能性がある。



第 27 図　久富古墳群ピット実測図（1/30）

（１）遺物（第 28 図、図版 18）

遺物出土状況

ピット１からは中世の擂鉢と銅銭（第 28 図 2・3）が出土し、ピット２からは須恵器の壺（第 28 図１）が出土している。

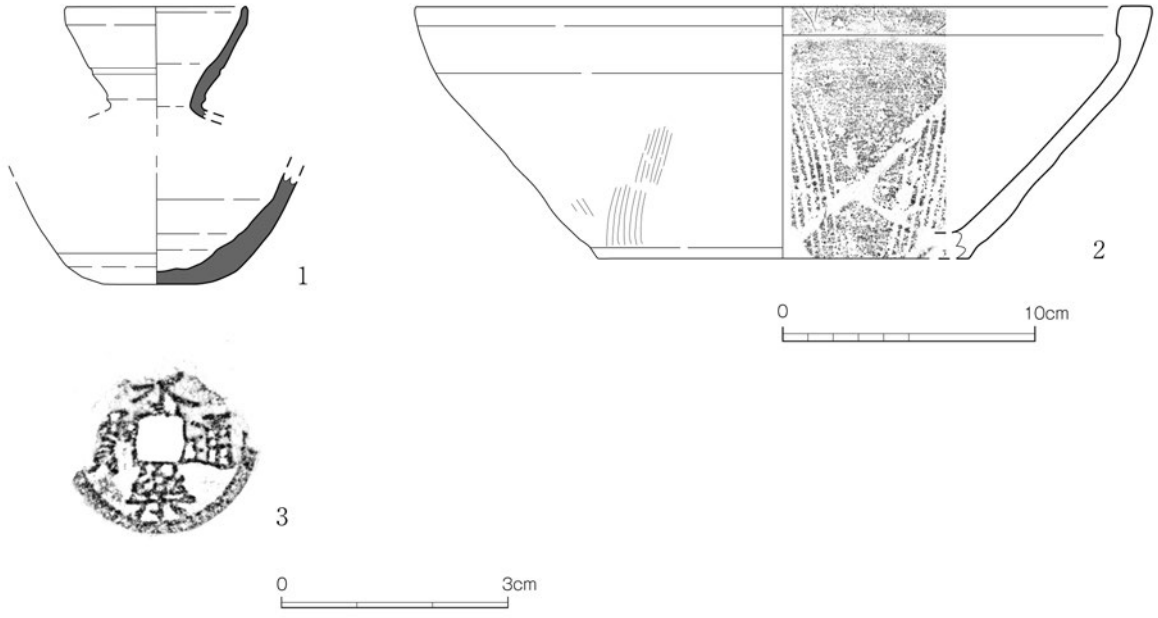
遺物

須恵器壺（第 28 図１）

１は須恵器の壺である。口縁部と底部の破片が残存し、口縁部片の中位には沈線が１条巡る。口縁部の内外面と底部の内面については回転ヨコナデ、底部の外面については回転ヘラケズリによって仕上げる。

擂鉢（第 28 図２）

２は瓦質土器の擂鉢で、全体の４分の１程度が残存している。口縁部はやや厚く、断面四角形と



第 28 図　久富古墳群ピット出土遺物実測図（１・２は 1/ 3、3 は 1/ 1）

なり、底部は平底になる。外面には粗いハケ目が、内面にはスリ目が付く。

銅銭（第 28 図３）

３は銅銭である。一部が欠損しているものの、中央の孔の周りには「永楽通宝」の文字が見えることから、中国明朝で鋳造され、日本国内に流入した銅銭であると考えられる。

Ⅳ　おわりに

久富古墳群の調査では、古墳４基、小石室２基、ピット２基を確認した。以下、今回調査した遺構のうち、古墳に着目して、その変遷について述べることとする。

（１）古墳の変遷

近接して築造される久富１号墳と２号墳については、「Ⅲ　調査の記録」において述べたように、２号墳の周溝を切るような形で１号墳の周溝が掘削されたことが土層断面から確認されたことから、２号墳→１号墳のような先後関係になる。古墳から出土した土器については、良好な出土状況であった１号墳の土器についてみると、杯蓋に宝珠形つまみが付き、口径が 9cm 前後のものが主体となることから、おおよそ７世紀前半～中頃の時期が与えられる。２号墳については、杯蓋に押しつぶしたようなつまみが付くなど、１号墳から出土した土器に比べ、やや後出する時期の特徴を持つ土器が出土しているが、そのほとんどが前庭部の埋土から出土していたものであることを考えると、追葬時や墓前祭祀などに関する土器と考えられる。３号墳については、墳丘や石室の残存状態が悪く、また出土遺物も鏃のみであることから、時期比定の材料に乏しい。石室の小型化の傾向がみられる点や鏃の頸部が屈曲せず、明瞭な段を持たないという特徴などから、１号墳とほぼ同時期かやや後出する時期に築造されたと考えられる。４号墳については、１～３号墳と比較して明確に石室の小型化が進行し、なおかつ、これらの古墳から離れた位置に築造される。出土した土器についてみると、杯蓋のかえりがなくなり、口縁端部が下方に折り曲がるほか、杯の底部に高台が付くなど１～３号墳から出土した土器と比較して、明らかに新しい時期の特徴を有している。このことから、４号墳の築造時期は７世紀後半～８世紀初頭に比定される。

以上を勘案して、久富古墳群における古墳の築造順序に関しては、２号墳→１号墳→３号墳（１号墳との時期的な懸隔は、ほぼないと考えられる）→４号墳と想定しておきたい。

（２）小石室について

今回の調査では、２基の小石室を確認した。小石室については出土遺物がなく、時期比定や遺構の性格に関する評価は難しい。石室の構造をみると、かなり形骸化が進んでいるものの、墓道の存在や閉塞石を意識したと思われる乱雑な積石などがみられ、極小化した横穴式石室であると考えられる。こうした石室は、改葬墓として営まれた可能性が考えられる。

（３）久富古墳群の評価

以上のことから、久富古墳群は７世紀代にかけて、同一の墓域内に墳丘墓と墳丘を持たない小石室が営まれる終末期群集墳の典型例であると考えられ、みやこ町域における終末期群集墳の調査事例が少ないことから、重要な調査事例となった。久富古墳群が所在する今川・祓川流域には、古墳時代後期～終末期に営まれた群集墳が密集していることから、今後の調査事例の蓄積や研究の進展により、律令国家形成期における当該地域の社会像がより明瞭になることが期待される。

図　版



1　久富古墳群全景
（真俯瞰）



2　久富古墳群全景
（西上空から）

図版２



1　久富古墳群調査範囲
（真俯瞰）



2　１号墳・２号墳全景
（真俯瞰）



3　２号墳全景
（真俯瞰）



１　３号墳全景
（真俯瞰）



２　１号小石室全景
（真俯瞰）



３　４号墳・
２号小石室全景
（真俯瞰）

図版４



1　1 号墳調査前全景
（南から）



2　1 号墳調査後全景
（南から）



3　1 号墳前庭部
（西から）



1　１号墳前庭部
出土須恵器
（南東から）



2　１号墳閉塞石
（南から）



3　１号墳奥壁
（南から）

図版６



1　1 号墳右側壁付近
出土須恵器
（西から）



2　1 号墳前庭部
断面土層
（南東から）



3　1 号墳墳丘北側
ベルト土層
（西から）



１　２号墳調査前全景
（南東から）



２　２号墳調査後全景
（南東から）



３　２号墳奥壁
（南東から）

図版８



１　２号墳閉塞石
（南東から）



２　２号墳墳丘西側
ベルト土層
（北西から）



３　２号墳墳丘北側
ベルト土層
（南西から）



１　３号墳調査前全景
（南東から）



２　３号墳調査後全景
（南から）



３　３号墳石室
（南から）

図版10



1　３号墳石室左側壁
（南東から）



2　３号墳石室右側壁
（南西から）



3　３号墳外護列石
（南西から）



1　4号墳検出時
（南東から）



2　4号墳調査後全景
（南東から）



3　4号墳閉塞石付近
出土須恵器
（南東から）

図版12



1　4号墳左側壁付近
出土須恵器
（南東から）



2　4号墳石材撤去後
（南東から）



3　4号墳石材撤去後
（北東から）



1　1号小石室調査後全景
（南西から）



2　1号小石室調査後全景
（北東から）



3　2号小石室検出時
（南西から）

図版14



1　２号小石室調査後全景
（南から）



2　２号小石室調査後全景
（南東から）


第 11 図－ 2


第 11 図－ 3


第 11 図－ 5


第 11 図－ 6


第 11 図－ 7


第 11 図－ 8


第 11 図－ 9


第 11 図－ 10


第 11 図－ 11


第 11 図－ 12

出土遺物 1 （ 1 号墳出土遺物）

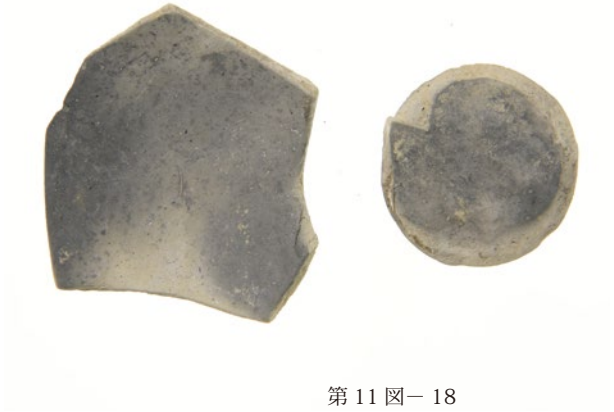
図版16



第 11 図－ 15



第 11 図－ 16



第 11 図－ 18



第 11 図－ 19　第 11 図－ 20



第 15 図－ 1　第 15 図－ 2



第 15 図－ 4　第 15 図－ 3



第 15 図－ 5



第 15 図－ 6

出土遺物２（１・２号墳出土遺物）



第 19 図－ 1



第 22 図－ 1



第 22 図－ 2



第 22 図－ 3



第 22 図－ 4



第 22 図－ 5



第 22 図－ 6

出土遺物３（３・４号墳出土遺物）

図版18



第 22 図－ 7



第 28 図－ 1



第 28 図－ 2



第 28 図－ 3

出土遺物 4 （ 4 号墳・ピット出土遺物）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ひさどみこふんぐん
書　　名	久富古墳群
副　書　名	福岡県京都郡みやこ町犀川久富所在古墳群の調査
シ リ ー ズ 名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 289 集
編 著 者 名	出見　優人
編 集 機 関	九州歴史資料館
所　在　地	〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3　℡ 0942-75-9575
発 刊 年 月 日	令和 8（2026）年 3 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
久富古墳群（ひさどみこふんぐん）	福岡県京都郡（ふくおかけんみやこぐん）みやこ町犀川久富（まちさいがわひさどみ）	40203	910498	33°20′47″	130°41′21″	2024.5.8 ～ 2024.11.7	2,500㎡	県道下深野犀川線道路新設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久富古墳群	古墳	古墳時代	古墳 4 基 小石室 2 基 ピット 2 基	須恵器 土師器 瓦器 銅銭	1 号墳に明確な周溝を伴う。 同一の墓域内に墳丘を持つ古墳と墳丘を持たない小石室が築造される。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120261
登録年度 07	登録番号 0002

福岡県文化財調査報告書　第 289 集

久富古墳群

令和 8 年 3 月 31 日

発行　九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　株式会社　三光 福岡営業所
福岡県福岡市博多区山王 1 丁目 14 番 4 号